特265
347

2

0054562000

0054562-000

特２６５－３４７

裏町勘右衛

古川政次郎・著

鈴島印刷所

増訂３版
昭和９

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも

摂津地方話

裏田町
勘右衛門

納本

特265
347

特265
397

増訂三版

裏町勘右衛

目次

牟田部の伯母……一
太宰府詣り……七
片目の人……一四
十五毛猫……一九
うらめしや……二三
石からひ……二四
貧乏神と福の神……二六
蛙……二八
狸の巣……三一
夏蜜柑……三五
烏を賣つた話……三七
腹切り……四〇
幽靈……四一
狐を捕へて五十兩……四七
痩せた馬……五三
にはとりの巣……六一
獺の皮を賣つた話……六三
フルイを賣つた話……六五
鴨……六六
深田の狐……六九

鰻……七一
不思議な棒……七六
勘右衛の家……八〇
小さい牛の子……八四
雉……八七
そりや嘘じや……九八
富士山より高い山……一〇三
餡汁……一〇四
聲かけてくれ……一〇七
法螺吹三人……一〇八
附錄　傳說　松浦佐用姫
金の茶釜……一一〇
涙が溢れる……一一三
まことの幽靈……一一四
狐の女郎……一一六
隱れ笠に隱れ簑……一一九
鯛……一二四
頭巾と卷物……一二六
菜を蒔いて五十兩……一四〇
閻魔王と勘右衛……一四四
勘右衛の子……一四六

はしがき

私達が幼い頃、親にいつもねだつたのは二つの暖かい乳房と、裏町勘右衛の昔話でありました。

その懷かしい、唐津名物男の勘右衛の話が、今頃は世間から忘れられやうとしてゐます。

その地方の民話は、その地方の人々の情味を豐に育くんでくれる寶であります。

私達は永く傳へたいものだと思ひます。

昭和九年の秋　三版

打上村にて

古川政次郎

この度、佐賀の山口亮一先生から、表紙の繪を書いて頂くことが出來ましたことを厚くお禮申し上げます。

著者

年田亦の伯母

「伯父さん
あの馬は
銭糞を
垂れますぜ」

蔦北生と
蔦北養

裏町勘右衛門

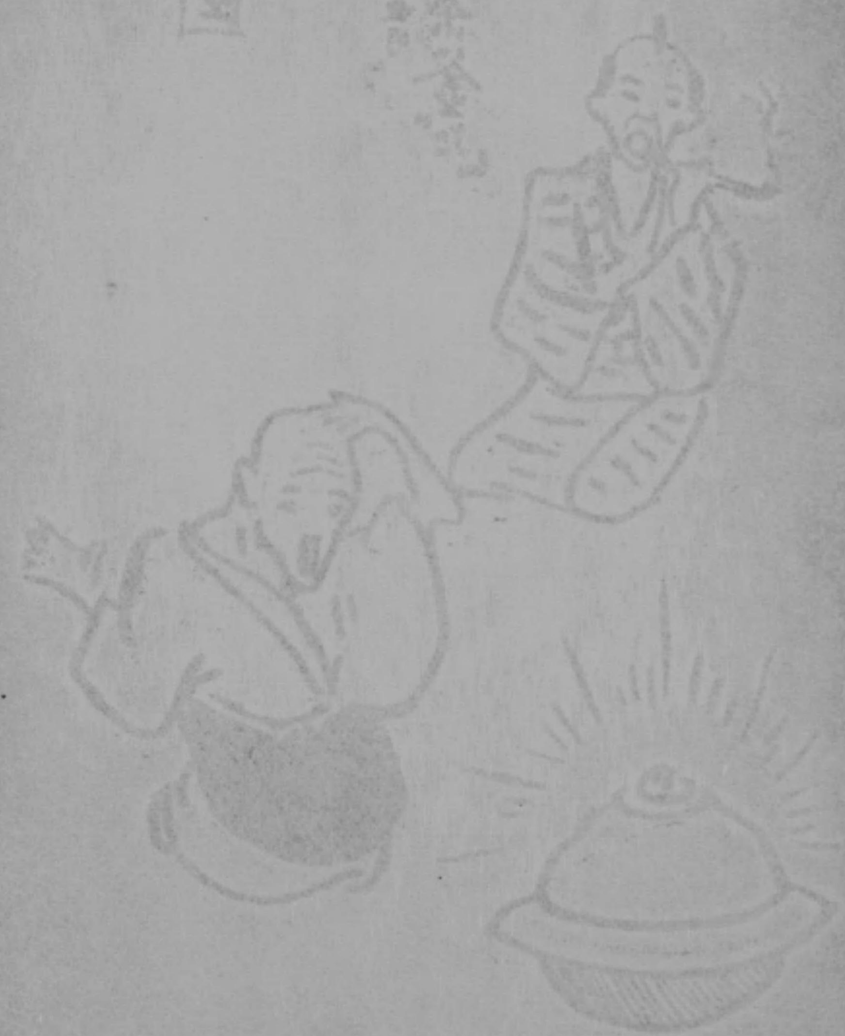
牟田部の伯母

勘右衛が牟田部の伯母の内に遊びに行ました、秋の初で、まだ少し暑い時です、庭の梨の木に蟬がしきりに鳴いてゐます。

『伯母さん、遊びに來たよ』

勘右衛は親類の内でこの伯母さんが一番好でした、この伯母さんの内だけは自分の家と同様ちつとも遠慮しません。

『おう勘右衛かい、よう來たのう、暑かつたろう早う眞裸になつて涼まんかい』伯母さんは本當に勘右衛に對しては親切でした。



『お前一時見なかつたら大そう大きくなつたのう、もう大人と違はんたい、大きな男になつたのう』

伯母は勘右衛を見て感心してゐます。

勘右衛は上にあがつて板梁の上に寢轉んで休んでゐました。

『どれ久し振りに來たから米の飯でも焚いて御馳走しゆう』

伯母は庭の方へ行きました。

この伯母さんの內は、勘右衛の內と同樣、生活がよくありません。殊に此の土地は米が少い所で、年中麥のご飯に粟のご飯ばかり食べて、白い米の飯などを焚くことは容易にありません伯母さんは可愛い甥の勘右衛の爲に三合ばかりの白米を奮發して米の飯を焚き始めました。

伯母さんは、米を磨ぎながら、鼻にかゝつた小聲で拍子をとつて、妙な、歌を歌つてゐました。

釜にしこみがすむと、裏の焚物小屋から松葉を一抱もつて來て、附木で火を焚き附けて、火

起竹でフウ〳〵吹き附けます。白い煙が家の中一ぱいに擴がつて來ます、伯母さんは眼をこすりこすりして火を焚いてゐます。

やがて水がわいて、蓋の下から白い泡がプク、プクと吹出て來ます。

伯母さんは七十近くで眼が惡いのでしたから、もうご飯も出來ただらうかと思つてちよいと釜の蓋をとつて開けて見ました、その拍子に伯母さんの鼻から鼻汁がポトリと一雫ご飯の中に落込みました、それを此方から見てゐた勘右衛は『おや、鼻汁が飯の中に落ちたぞ、此處にゐたらあのご飯を食べねばならぬ、鼻汁のご飯はいやだ』と思つたので、勘右衛は急いで歸る用意をしました。

『伯母さん、急に用が出來たから今日はもう歸るよ』

『歸るてお前今漸う〳〵ご飯が出來たぢやないかい、歸るならも一時待つてご飯を食べてからお歸へり、折角米のご飯を焚いたじやないか、こら勘右衛』

伯母さんは氣狂のやうになつてとめたのを勘右衛は飛ぶやうにして逃げて仕舞ひました。

その日はそれですみました。

五六日經つて勘右衛はまた牟田部の伯母さんの内へ行きました。

「伯母さんまた來た」

「よう來た、お前は先達はなぜ歸つたかい、折角白御飯を焚いたのに——。まあ、今日はゆつくり遊ばんかい」

伯母さんはさう言ひながら庭の方から大きな茶碗に甘酒を一杯盛にして持つて來ました。

「伯母さん、甘酒だね」

「そうよ、まだ澤山あるからうんとお上り」

勘右衛は丁度咽喉がかわいてゐる時でした、殊に甘酒ときたら大好物でしたから茶碗一杯を一口に飲んで仕舞ひましな。

「伯母さん、もう一杯下さい」

「何杯でもいゝよ」

おばさんは又山盛に汲んで來ました、勘右衛はまた一口に飲み干しました。

「おばさん、もう一杯」

おばさんはまた一杯汲んで來ました、勘右衛はそれを飲で漸く落附きました。

「おばさんは甘酒作りなら名人だね」

「ホ、、、、。そう旨かつたかい」

「本當に旨かつたよ」

「さう言はれると俺も嬉しいよ、實はね、先達お前が來た時米のご飯を焚いたがね、お前が食べずに歸つたじやらう、米の飯を自分が食べるのも惜しいと思つたから、あれで甘酒を作つたのだよ」

その話を聞いて勘右衛は急に胸が惡くなつた、それは前に來た時おばさんが御飯の中に鼻汁を落し込んだ事を思ひ出したからです。

「あの御飯で作つた甘酒なら食べぬ筈だつたのに」

さう思つても、もうのんで仕舞つてからは何うすることも出來ません、それから勘右衛は胸が悪くて仕方がないのです。

『おばさん、用が出來たから歸るよ』

勘右衛はうろたへまはつておばの内を出ました。

何か口なほしに旨い物がありそうなものだとしきりに氣附けて往來を歩んでゐますと、道の眞中に茄子の味噌漬が一つ落ちてゐます。

『これはよいものを見附けた』

勘右衛は一人喜んでその茄子を一口に食べました。

『ああ、これで漸く口が直つた』

さう云つて道を歩んでゐますと、向ふから一人の盲目の坊主が杖をコツ〳〵ついて此方へ來てゐます。そして勘右衛に逢ふとその坊主の盲目が

『もし〳〵、この邊に味噌漬茄子が落ちてはゐませんか。』

さう言つて尋ねます、勘右衛は困つたなと思ひましたが自分が食つて仕舞つたので知らぬ振をするより外に仕方かありません。

『見へないやうじや、その茄子はどうしたなすびだつたかへ』

『へい、あれは甚だ粗末な話ですが、私は痔が悪いので、人の話には、なすびの味噌漬を三年間尻に挾んでをれば痔の病氣が癒ると聞きましたので今日まで尻に挾んでゐたのを、先刻つい油斷して落してしまひました』

それを聞いた勘右衛はどんな氣持がしたでせう。

太宰府詣り

勘右衛が、太宰府まいりを思ひたちました。昔の太宰府まいりは今と違つて、汽車もなければ自動車もありません、十何里といふ道を歩まねばならないのです。丁度夏の盛りでした、日

中にはとてもあゆめないので、朝、今の午前二時頃から起きて、暗い夜中に茶漬をかき込んで辨當を風呂敷につゝんで急いで家をでました。

空には、天の川が遠くつらなつてゐます。星が銀の砂子をまきちらしたやうに光つてゐます打寄する波の音をきゝながら、濱崎、吉井、前原――と急いで道を歩みました

そのうちに、東の空がだん〳〵明るくなり、間もなく雲の中からお陽樣があがつてきます、そしていつのまにかお晝ごろとなりました。

『ああ、ひもじくなつた』

勘右衛はつぶやきながら、道端の草の上に腰を下ろして、辨當をたべやうと思つて、ちよいと背中におぶつてをる風呂敷をといてみると大變です、風呂敷と思つてゐたのが母の腰卷でした。

『これはしまつた』

勘右衛も思はずひとりごとを言ひました。けれども今更どうする事もできません、その腰卷

が他人のでなく、母の腰卷でしたから、まあ仕方がないと諦めて、兎も角、中につゝんでゐる辨當を食べたいと思つて、だん〳〵擴げてみますと、中から木の枕がころりと出て來ました。

『何だ、辨當をつゝんだ筈だつたのに之は木の枕じやないか』

勘右衛はなきたいやうな氣になりました。

『今朝は、俺はどうしてこんなに間が抜けたことをしたのか』と思ふてくやしくてたまりません。

母の腰卷をすてる譯にもゆかず、枕をすてるのも惜いし、またもとの通りにつゝんで、今度はそれを提げて、てく〳〵と歩みました。

漸う〳〵太宰府につきました。

お池に架けてある太鼓橋を渡つて、梅ヶ枝茶屋には見向もせず、拜殿の前にきました。懷の中には、母からもらつたお金と、近所からもらつたお金と合せて二百文程、繩にぬいた錢をもつてゐます。

『さうだ、お賽錢をあげねばならぬ』
さう思つて、懐から二百文の拔錢を出して、三文だけ拔きとりました。
その時ですどうした機づみだつたか、三文の方を賽錢箱へなげるはづだつたのを、過つても一方の多い方のお金をなげこんでしまひました。
『おやつ』
さう思つても追ひつきません。
『何だ馬鹿々々しい。あれだけのお金をみんなお賽錢に上げてしまつて、饅頭一つだつてたべられない、近所の人からお金までもらつて來たのに土產一つかへない』と思ふと、悔しくてたまりません。
そのうちにお腹はへつてしまつてとても歩けません、仕方がないので三文のお金を大切にして茶屋に寄りました。
、そこには出來たての饅頭がでてゐました。

『ねえさん、この饅頭はいくらかへ』
眼の小さい、愛嬌のよい下女が出てきて、
『饅頭ですかへ、これは少し大きうございましてな、どれでも選りどりで三文でやす』
といつてにつこり笑ひました。
勘右衛は、ふと其處にあつた大きな看板の饅頭に眼をつけました。それも食べられる饅頭と思つたのです。
『この饅頭をたべたら腹一杯にならう』
さう思ひましたので
『ねえさん、どれでも矢張り三文かい』
『えゝ、三文でやす』
それをきくと、勘右衛は三文をやつてその大きな饅頭の看板をにぎるが早いか、一目散にかけ出しました。

それを見た下女は驚くまい事か

『もし〳〵、お客さん、そりや看板でやすぜ、木で作つた看板でやす、たべられません』

そう言つてさけびましたが勘右衛は少しも耳に入れず、何處かへにげてしまひました。

勘右衛は、十町餘もにげてきたので、漸く安心して、何はさておき、一つ饅頭を食べてみやうと思つて口を當てゝ見ますと、饅頭ではなく木です、木の上に紙をはつて作つたものでした。

『何じや、こりや木じやないか、馬鹿〳〵しい』

勘右衛は顔をしかめながらポイと田の中へなげこんでしまひました。

お腹はへつてとても歩けません。

何うかして、何か食べる工夫はないものかと考へてゐる所へ、一人の百姓が鼻の缺げた牛を引いてやつて來ました。勘右衛は何と思つたか

『百姓さん、その牛は鼻かげじやな、一つわしがついであげやうか』

と言ひました。

『では何うかお頼みします』

『では私が請合ひました、まあ御飯にお酒を用意して下され』

百姓は、勘右衛を自分の家につれていつて御飯や御酒を用意して出しました。

勘右衛はやうやく食物にありついたので、さあ飲むこと食べること。

食事がすんで、勘右衛はやうやく落附いて來ました。

『御主人、只今から牛の鼻をつぎませう、さあ、鼻のごけを下され』といひました、百姓は妙な顔をして

『そんなものはありません』といひますと勘右衛

『そのこげがなくちやつがりません』と言つてポイとにげてしまひました。

お蔭でお腹が太りました。

片目の人

勘右衛が何かの用で久里村を通りました、その日は朝からご飯をたべなかつたのでひもじくてたまりませんでした。

村の入口から三軒目の家の前を通りますと、その内の若いお嫁さんが漸くご飯を焚き上げて釜から飯櫃にうつしてゐます、鍋には何かお菜がにえてゐるらしくおいしさうな香がぷん〳〵します。

勘右衛はとてもこらへる事は出來ません。

『御免なつせ』

遠慮なくその内にはいりました。

『はあい』

嫁さんは知らない人が來たので勘右衛の顏をじろ〳〵見てゐます。

『お内の旦那とそこの先であつて來ました』

勘右衛は慣れ〳〵しく言ひながら上り口の所へ腰をかけました。

『旦那が、内へ寄つて飯でも一杯たべて待つてをれ、直ぐ歸るからとおつしやいました』

勘右衛がまことしやかに言つたので、お嫁さんはてつきり本當だと思つてお膳にご飯を用意してお菜を皿に盛つて勘右衛の前に出しました。

勘右衛はお酒が飲みたくなつてきました。

『嫁御、退屈だつたら酒でも一杯飲んでまつてくれ、先達の愛神様のお祭りの餘り酒が少しあるからつて旦那が言ひましたよ。』と言ひました。

嫁さんは、勘右衛がいふ通りお祭の時の餘り酒があつたのを二合半ばかりもつてきました、勘右衛はそれをキュウと飲み干しました、ひもじい時のお酒の味は又格別で五臓六腑にしみ渡るやうです、

『久しぶりでいい酒に出逢つた』とさゝやきながら今度はご飯の方をたらふく頂戴しました

もう用はすんだから、主人が歸らない内にと思つて。
『嫁御・私はその邊に用があるからちよいと出て來ます』
と言つてふいと出てしまひました。
その家の主人はまもなく歸つて來ました、みるとお客があつたらしくお酒や肴などを並べてあります。
『嬶よ、誰か來たのか』
とたづねました。
『誰か來たかつて、お前のお友達が見へたじやないかい』嬶はいつになく不機嫌な顏です。
『俺の友達？一體それは誰だい』
『それはお前こそ知つてゐらうよ、お前と道であつたつて言ふんじやないかい』
『俺に今日は友達なんかにはあつちやをらん』
『へえ、じや今のお客が先刻おまへと村はづれであつたと言つたのはうそだつたかへ』

『おまへは狐にでもだまされてはをらんか』
『いゝえ〳〵、たつた今、お客がきてな、村端れでこの家の旦那に出逢つたらお祭の酒が餘つてあるからお酒でも飲んで、ご飯でもたべてまつてゐてくれ、直ぐ歸るからとお前が言ふたから—と言ふじやないかい、そしてご飯なんかすこしもないやうにたべてしまつたじやないかい』
その話をきいて主人は大層をこりました。
『嬶あ、お前もこい、その奴を捕へて代官樣へ屆けてやる、どの奴かお前は顏を覺へてゐるじやらう、さあついて來い』
其處の主人は、はだしになつて勘右衞の後を追かけてきました。
勘右衞は大野村の村端れをとぼ〳〵あるいてゐると誰か後からさけぶやうです、ちよいと振りかへつて見ると、さつきの嫁御とその主人らしい者が血相をかへて走つてきて居ます、勘右衞は心の中に『しまつたな』と思ひましたがなか〳〵うろたへません。

「こら、またつしやい、内の女房をだましてお酒をたらふく飲んだ上に、ご飯までたべやがつて、太い野郎だ、またつしやい」

そのさけび聲がだん〳〵近づいてきます。

勘右衛は即妙の智慧をだし、片目をつぶつて後を向いた。

「私かい、用があるのは私かい」

と言ひました。

さけんだ主人は、見ると片目の男ですから

「おい嬶、さつき來たのは片目の男だつたか」

「いゝえ、片目じやありません」

「あの男は片目だよ」

「片目の人なら違ふよ」

主人は全く人違ひと思つたので

「どうもすみません、あなたではありません」

斯ういつて氣の毒さうにお禮をしました。勘右衛は「しめた」と思つてさつさと急いで行つてしまひました。

十五　毛猫

大石町の御隱居さんの内には、きれいな三毛猫を飼つてありました、春の陽のポカ〳〵と氣持よく照つてゐる日、御隱居さんは日あたりのよいえんがわで、御じまんの三毛ねこをひざの上に載せながら、うつら〳〵とゐねむりをしてゐました、そこへひよつくり勘右衛がは入つて來ました。

「御いんきよ、相變らずゐねむりがお仕事ですかい」

「おう、勘右衛か、お前口がわるいな」

「本當に御いんきよは樂なお身分で羨ましいこつですなあ」

「冗談いつちやくれるなよ、これでもなあ、若い時は一働きしたもんだよ、もうこの年ではねえ、伜夫婦の邪魔になるばかりだからね、斯うして隠居をしてをるのだよ」

御いんきよはさう言つて、ねこの顔をなでてゐられる、三毛ねこはグル〳〵、グル〳〵と氣持よささうにたけつてゐる。

「時に勘右衛、この三毛ねこを見てくれ、見事な三毛猫ぢやらう」

御隠居は、ほめてくれと言はん許り、併し勘右衛は人のものはほめることが大嫌ひ、そんな時には返つてへこましてやらうと言ふ心の虫がはらのそこからわいて來る男。

「三毛ねこはめづらしうは御座りません、わつしの内には十五毛ねこがをりますよ」

御いんきよは十五毛ねこと聞いてびつくり

「ええ、十五毛ねこつて、わしはまだ十五毛ねこてものは見た事が無ければ聞いた事もないが一体そんなものが居るかへ」

「嘘と思ふなら、來て見ておくんなつせ」

「では裏町までは遠くも無いから、見物に來よう。」

そこで御隠居は勘右衛の内に行く事になりました、さて、大石町の裏町に行くと、例のおそまつな勘右衛の家があります、勘右衛は内へ入ると、キジヤ、キジヤと呼びました、すると竈のすみからやけどした三毛ねこが出て來ました。

「御隠居、これですよ十五けねこは」

「そりや三けねこじやないか」

御隠居は大層怒つてさういひました、勘右衛は笑ひながら

「それが火に焼けて、しけてゐますじやろ、そりで、三け、八け、四けで丁度十五け猫になるのですよ」

「お前はまたそんな事を言ふて、わしを斯んな所までひき出してこまるじやないか、こらい馬鹿をみたこつじや」

御隠居はぶつ〳〵いつて歸へりました。

うらめしや

勘右衛が切木の牡丹見物に出掛けました、石切の坂を登る途中で腹が減つて歩けないのです水ばかり飲んでやつと石切の辻を越へました、それから竹木塲の一軒茶屋で一休みしやうと思つて寄つてみると誰もゐません、表に鳥かごが下がつてゐて、小鳥がうらめしさうに鳴いてゐるばかりです。

茶屋に腰掛けて休んでゐると、一時に腹が減つたやうな氣がします、ままよ、見附けられたら何とか言ひ譯も出來やうと思つて、家の裏の方へ廻つてみると、そこにお飯がつつてありますので、惡るいとは思ひながら自分で勝手に茶碗に盛つて食べ初めました、一杯、二杯、三杯餘程腹が減つてゐたものかなか〳〵腹一杯になりません、「もう一杯」と言つて五杯目を食べかけてゐる所へこの茶屋の婆さんが歸つて來ました。

ばあさんが歸つて見ると、誰か人相の惡い男が家には入り込んで、ムシヤ〳〵と飯を盜み食

ひしてゐるので少々腹が立つたのです。

「誰かへ、他所のうちには入り込んで斷り無しでご飯を食べるのは」

口をゆがめたやうにして叱りました。

「わしは裏町の勘右衛じやがな、飯屋に來て飯を食べるのは當り前じやないかへ」

勘右衛はまだ飯を食ひながら返事をしました。

「わたしのうちは、茶屋はしてをりますが飯屋はしちやをりまつせん」

「でもちやんと飯屋の看板がかゝつてゐるじやないかへ」

「飯屋のかんぱん？そんなものはかけてゐる筈じやなかが—」

この時勘右衛は漸うやく五杯目を食べて仕舞つて表へ出て來ました、そして鳥かごを指しながら

「これじや、これが飯屋のかんぱんじや、その小鳥がウラメシヤ、ウラメシヤと言つて鳴いてゐるじやないか、うらは飯屋になつてをるといふから、わしは裏に來て飯を食べたのじや、

まだわし達のつれが二十人許り後から來ますぞ、ひもじい連中ばかりだからうんと飯をたいて出さねばすむまいよ」

勘右衛は兩手を組んで心配顏を作りました正直なばあさんは大變に困まつて

「さうですかへ、そんならあんたからたべられたのは仕方ないとして、あとから二十人も來て食べられちやたまらんが、勘右衛さん、何んとかよい工夫はあるまいか」

「そりや何でもない、あの鳥かごを裏の方に持つて行つてかけておかつしやい」

斯う言ふてさつさと切木の方に出かけました。

石からひ

切木の牡丹は、その頃から松浦郡の一名所になつてゐました、あの大きな牡丹の花が澤山さきみだれてゐる豪勢さは、とても口では言はれません、元來無風流に生れて來た勘右衛も、このぼたんにはさすがに感心してながめてゐます、しかしそれも束のま、また腹が減つて來ました。

花より團子—早く歸らうと思ひました、歸りは竹木場越をする譯に行きませんので、大良の方にまはらうと思つて、切木野の廣い原を歩いてゐる內に、つひ道をふみまよつて仕舞ひました、さあ、お腹はへる、何とかして食べる工夫は無いものかと思案にくれてゐると、そこに五六人の百姓たちが切木野の荒地を開墾してゐました、眞中に大きな石があるので之を取除くのに困まつてゐるらしい、勘右衛はすぐそれを見て

「その石があつちやお困りじやろ、わしが片附けてやらうか」と言ひました。

「そりや本當かい」

「本當とも、わしはどんな大きな石でも背にからつて行くからな」

「じやお前さん、一つ骨折つてくれさつしやい」

「何より易い事じや、だが少々腹がへつちよるけんお飯一つ馳走にならう」

「御もつともじや、ここに辨當があるから食べてくれさつしやい」

勘右衛は他人の辨當をたべて、やつと腹一ぱいになりました。

はらが出來たので、勘右衛はのこ〳〵と大石のそばにきてしやがみました。

「よい、みなの衆、わしの背中にその大石をのせて下され」

と言ひました、皆の衆は眼をクリ〳〵させて

「この大きな石がどうしてわしらの手でかゝへられるものか」と言ひました。

「そんなら仕方がない」と言つてにげてかへりました、おかげではらだけは一ぱいになりました。

貧乏神と福の神

裏町の近所に、金貸の長者どんと評判された金持がゐました、この主人は、いつも大きな縞の財布を首にかけて、貸金を集めて歩いてゐました。勘右衛もこの人から金を借つてゐますの

で一寸頭が上がりません。

この長者どんは大へん縁起をかつぐ男でした。

丁度その年も大晦といふ日、大石町の曲り角で、長者どんは勘右衛にあいました、勘右衛が貧乏で、借りた金を今に返さないので、長者どんも堪へかねて

「貧乏神は何處へ行くか」

と言ひました、勘右衛を貧乏神にしてしまつたのです、勘右衛は

「今、旦那のうちに」と言つてさつさと通り過ぎてしまひました。

長者どんは、今勘右衛が言ふた事をじつと考へてみました、今、旦那のうちに行く所だといふ意味だな、貧乏神が俺の内に來るといふ謎だ、之は見事にやられたと氣ついて大變くやしがりました。明くれば正月の元日です。

長者どんは元日にまた大石町の角で勘右衛と逢ひました。

長者どんは、昨日の失策もありますし、今日は目出度い元日でもあるし、我慢をして、勘右

衛がよろこぶやうにと考へましたので

「やあ福の神、今日はどちらへ」

と言ひました、充分敬意を表したつもりで福の神と言つたのです。

「今日はお前さんの内から出て來たのじや」と言つてさつさと行過ぎてしまひました。

さとりの遲い金貸の長者どんは、よく考へてみました、福の神が今お前の内からでてきたと言ふと、つまり元日早々福の神がでたといふ謎であるとしつて、なんだ馬鹿々々しいと言つて大變に口惜しがりました。

蛙

五月の田植がすんだ揚句、村の若者たちが十四五人寄つて、早苗饗の馳走をしました、村端の茂平さんの内の雄鷄の六斤半もあるのを買つてきて、首をしめて毛をむしつて、料理をする

、一方では午蒡や大根を洗ふ、それは〳〵忙しい。

しばらくたつて、漸く鷄がにえた、大鍋を板梁のうへに持つてくると、その鍋を中心にして十四五人が車座になつてすはる、世話係がゐて皿に一杯づゝ盛つて渡してゐる、

そこへ勘右衛がひよつくりやつて來ました。

「勘右衛つて仕方のない奴だ、どこから鷄の香をかきだしたものか、猫と同じだ、馳走をしてゐるといつもやつて來る、割前は一度だつて出した事はないくせに——」とみながさう思つて苦い顏を見合せてゐます。

勘「今日は早苗饗かへ」

若一「あいよ」

勘「うまさうじやのう」

斯うなると。幾ら若者だつて勘右衛にたべろと言はぬ譯に行きません。

若二「勘右衛どん、鷄じや、一杯どうだい」

勘『一杯ご馳走にならうか』

勘右衛は待つてゐましたと言はぬばかりに、板梁に上つて來て、そこにあつた皿をとつて自分で山盛につぎました。

勘右衛は、そこへ來る道で、蛙を一匹捕つて袂の中に入れてゐました。それを袂からそつと出して。自分の皿の中に入れておいて、その蛙を箸ではさんで

『よい若衆、見さつしやい、こんなものが鍋の中にあつた』

斯う言つて高くさし上げました。

『そりや蛙じやないか、蛙と一しよに煮たのか、じや今日の鶏はくへん』

外の連中は蛙をみて胸が惡るくなつて鍋の中の鶏を食ふ氣になりません、みんな皿を下してしまひました。

勘『若い衆、この鍋の中の鶏は俺にくれさつしやい、內の婆さんはなべの中にびきがは入つてゐたことを知らんから、わしが婆さんをだまして食べさしてやる』

勘右衛は斯う言つてなべながら提げて自分の家に持つて歸りました。

そして自分一人で六斤半の鶏を食べてしまひました。

狸の巣

近所に獵師の甚六と言ふ男がゐました、良で狸をとることが上手でした。

勘右衛がある日甚六の家に行きました。

『甚六どん、居るかい』

『勘右衛か、このごろは久しう見へんだつたなあ』

『甚六どん、私の內の裏にや狸が巣をかけちよるよ』

『勘右衛、そりや本當かい』

『本當所じやない、お前來てみたらどうかへ』

甚六は狸と聞いたらとても堪りません。甚六の極意の狸罠をかけるともう捕つたものです。肉は食べられるし、皮は價が高い、甚六は捕らぬ前からお金の勘定をしながら、鯨の油あげと、強い緒の綱を持つて勘右衛の内にでかけました。

『勘右衛、教へさつしやい、どれ、何所に狸の巣があるかへ、その巣のかたはらにかうして罠をかけておくとな、その狸はもう捕つたもんじや、捕れたら肉の半分位はお前に分けてやつてもよい、そりや狸と言ふ奴はなか〳〵旨いよ、油が多くてな、食べぬ先から口がむづ〳〵するハ、、、、。勘右衛をるかへ、勘右衛をるかへ」

「居るよ」

勘右衛は晝飯をしまつてゐる時でした。

「どれ、何處かへ、狸の巣のある所は、俺はかうして鯨の油あげに疊の緒綱を持つて來たよ、これで罠をかけてをけば、たぬきの奴は自分から來てかかるのだよこの鯨と來たら狸の大の好物じや、狸といふ奴はなか〳〵鼻がきく奴でな、この鯨の油あげを置いてゐると、どんな山

奥からでもやつて來るよ、この鯨をこんな具合でたべやうとすると、どつこいとこの綱に足がしめられて、ビユウツと上につりあげられる、その時になると、もう、たぬきは南無阿彌陀佛じや、わしらの腹の中に葬つてしまふ許りじや。勘右衛、お前と肉は半分わけじや、どれ、どこにたぬきの巣はあるかへ」

「田の木の巣かい」

「たぬきの巣だよ」

「あれ、裏の田を見さつしやれ、田の中に木が一本あるじやろ」

「あるよ、あんな所にたぬきが巣をかけてゐるかへ」

「あれ、田の中に木があるじやろ」

「ある」

「あの木の上を見さつしやれ」

「上に？何處に」

『巣が見る筈じやが』
『小さいのがある、ありや雀の巣だよ』
『あれが田の木の巣だよ』
『あれがたぬきの巣？、馬鹿な事を言はつしやい、あんな所へたぬきが巣をかけてたまるかへありや雀の巣じやないか』
『甚六どん、ようと心を落ちつけてきかつしやい、田の中にある木に巣をかけてゐるじやらう』
『そりやさうだ』
『だから田の木の巣じやないかい』
『田の中の木の上の巣かい』
『田の木の巣と言つて悪いかな、田の中の木の巣を田の木の巣と言つたんだよ』
『私あ、山にすんでゐるたぬきと思つてゐたのだよ、お蔭で鯨半斤と油一合損したじやないか』

甚六はブリ〳〵言つてかへりました。

夏蜜柑

上松といふ峠に古狐がゐて、そこを通る人をだますので近所の人は大變に困つてゐました、勘右衛はそれを捕へて狐をこらしめてやらうと思ひ立ちました。

勘右衛、ある日の夕方、狐の大好物の燒鼠を大きな袋に入れて上松の峠にでかけました。

峠の坂をあへぎ〳〵上つてゐると、向ふから十七八の娘がこちらへやつてきます。

『はゝあ、狐がやつて來たな』

勘右衛はそう思ひながらそしらね顏して歩いてゐます。

二人がであふと、勘右衛早速

『おい、貴様はうまく化けたつもりだな、だがこの勘右衛の眼にはちやんと貴様の正體がわかつてをるぞ』

と言ひました。

きつねは『しまつた』と思ひましたが今更どうすることも出來ません。

『恐れ入りました』

きつねは正直に白狀しました。

『何うだ、ちと化け方を俺が敎へてやらうか』

『へい、どうぞ敎へて下され』

きつねも勘右衛には參つてしまひます。

『では敎へてやらう、お前はどの位化けるか一つ試して見やう、さうだ、こゝに夏蜜柑の木がある、夏蜜柑になつてあの木に下がつてみろ』

きつねは、お易いことと思つたので直ぐに蜜柑の木にぶら下がつたかと思ふと、だん〳〵小

さくなり圓くなつて黃色の澤のある熟した見事な夏蜜柑になりたした。

勘右衛は

『大分よう出來たぞ』

と言ひながら、持つてきた袋の口を開けました。

袋の中にはきつねの大好物の燒鼠がは入つてゐます。

蜜柑に化けたきつねは、その燒鼠が眼につくと欲しくて堪りません、それで木の枝からころ〳〵と袋の中へ落ち込んで行きました。

勘右衛はこゝぞと思つて手早く袋の紐をくゝつてしまひました。

ハツと氣がついたきつねは、出やうと思つても口がしめられてゐるので出られません。

斯うして勘右衛は見事に古たぬきを一匹捕へました。

烏を賣つた話

勘右衛、酒屋に行つて酒の粕をもらつてきて前の畑へふり蒔いてゐました、すると、烏がたくさん飛んできて、その酒の粕をたべました、ところが烏はみんな酒に醉つ拂つて日頃黑い烏の顏が眞赤になつてゐます。

そこへ勘右衛が古俵をもつてやつてきました、烏は『それ人間がきた、早くにげろ』と思つて飛ばうとしますが酒のせいで體が動きません、勘右衛は醉拂つて轉んでゐる烏をひろつては俵に入れ、ひろつては俵に入れ、一寸の間に烏が俵一ぱいになりました。

勘右衛は八百屋に行つて鴨を一匹買つて來ました、そして烏を入れた俵と、鴨を兩方の棒にくびりつけて

カラスはよう御座すかい。

カラスはよう御座すかい。

斯ういつて唐津町を賣つて廻りました。

『おい見ろ、勘右衛が鴨を下げてをりながら烏はよいかといつてをるよ、鴨を烏と思ふてゐ

るなら安いに違いない、買はうじやないか』

さういつて

『おい〳〵、烏はいくらに賣るかい』

『たつた四文』

それを聞いた町の者、

『それどうだ四文の鴨なんてどこの八百屋だつてないよ、安いもんだ』

そんなことを小聲で話しながら

『では一匹もらうよ』

といつて四文のお金を勘右衛にやりました。

勘右衛は俵の中にかくしてゐたからすを一匹とつてポイとなげて行かうとします。

『おい〳〵このからすじやない、わしが買つたのはそちらのからすじや』勘右衛は

『これは鴨じや、からすじやない』と言つてさつさと先へ行きました、この流儀でからすは

みんなたか〳〵と賣つてしまひました。

腹切り

ある年の大晦に借金取からおしかけられた時の話です、勘右衛は、えいの魚を前日かつてきて、借金取がくるといふ大晦の日、自分の腹にそのえいをつけておいて、その上から着物を着て、帶をしてゐました。

案の如く借金取が勘右衛の内に押しかけて來ました。

勘右衛はみなの前に進みでて

『皆様、私の不始末から皆様へ金を借りてをきながら、支拂が出來ないのははなはだすみません、私はこゝで腹を切つて申譯をしますから何うか堪忍して下され』

斯う言ふが早いか、持つてゐた庖丁で自分の腹にザクとつきこんで横に引きますと、腹から

血が飛び出て、腸がだらつと前に出てきました。之を見た借金取は驚いたの驚かないの、さあ勘右衛が腹を切つた、腹を切らせた借金取は今に殿様からどんなおとがめがあるか知れぬ、さあ大事になつたと上を下への騒をしました。

借金取はもう金をとる段ではない、ぐづ〳〵してゐたら今にどんなひどい目にあふか知れない、早くこの場をにげねば後のたゝりが恐しいと思つて、懐に持つてゐた金はみんな勘右衛の方になげ散して、各自に我が家に逃げてかへりました。

皆がかへつた後で、勘右衛は起き上つてはらの中からえいの魚をとり出して、自分のはらを見ましたがかすり傷さへしてゐません、邊に散ばつてゐるお金をひろひ集めてその翌日の元日には、目出度い新年を迎へて年をとりました。

幽靈

勘右衛は裏町で一番の貧乏人でした、それで一番困のは大晦の借金取でした。
年の暮になると、米屋だの、魚屋だの、野菜屋だの、質屋だのから借金取りが列をつくつて勘右衛の内に押掛けてくるのです。
『俺のは先月から一文ももらつちやをらん、今度こそ何あつてももらはねばならん』
『俺のは先先月からの野菜代じや、今日はどのやうな事があつてももらふてかへる』
かういつて借金取がをしかけてくるのです。
勘右衛は本當にこまりました、持つてをる金は一文もない、質屋に預けに行かうには預ける物がありません、着物は着てる着物切です、けつして拂はないと言ふ精神ではなかつたけれど、無い袖はふられぬたとへ、さてこの大晦は何うして通さうかと考へました。
勘右衛は何か考へたらしく、妻を呼びました。
『嬶よ』
『何かえ』

『お前にちと相談がある』
二人は内密でしばらく話し合ひました、妻も勘右衛の説に賛成をしたらしく、大晦の日をまつてゐました。愈々その日になりました。
嬶は僅の金で佛様に備へる餅や、線香や、位牌などを買つて來て床の間に飾つてゐます、そして勘右衛は二階に隱れてゐます。
そこへ借金取の連中は何人もつれなんで勘右衛の内に來ました。
『勘右衛さん、居るかい』
『勘右衛どん、勘右衛どん』
しばらくすると女房がなきながらやつてきます。
『今日は何日と思ふかい、今日といふ今日は今迄の米代はみんな拂ふてもらはにやならん』
『俺も同じだよ、もう醬油はいつからやつちよると思ふかへ、半年も拂ふてないからな、そんな事だや醬油屋は立つて行きませんぜ。今日は何うあつても拂込んでもらはにやならぬ、大

概しれたもんぢや」
「本當にすみません、本當にすみません」
嬶はさう言つてしきりになきます。
「すまぬ〳〵といつても仕方ありませんよ、すまんと思ふなら早く借金は片附けてもらほうよ」
「……」
「おい、さう泣いたつて仕方がない、どれ、勘右衛どんはねるかい、そんな女相手では話は片附かぬ、勘右衛どんはをるかい」
「とう〳〵死にまして」となきながらいふ。
「ねえつ、勘右衛どんは死んだ?、そりや本當かい」
「へい、本當處じや御座いませつん位牌もあの通り飾つてをります」
見れば成るほど、床の間に白木の位牌と菓子やら線香などを飾つてあります。さうなると借

金取連中も困りました。
甲「おい米屋さん、困つたことじやのう、勘右衛どんが死んだげなよ」
乙「さうかい、そりやどうも——」
丙「氣の毒なこつじやのう」
甲「こりや困つた、借金を催促する譯には行きませんなあ。」
乙「さうですとも」
丙「香典の少しでもつゝまんでもよからうかのう」
甲「可愛想だ、人事じやござらぬ、つゝんでやりませう」
三人はさう話あつてお金を出し合せて紙につゝんで女房の前に差出して
甲「嫁御、本當に氣の毒な事です、そんな譯は知らんで借金とりに來たのは何うもすみません、何うぞ惡しからず思つて下され、これはほんの香典の記しじや、何うか受取つて下され」
嬶「何うしてそんなことを、借金は拂はない上に香典迄もらふなんてもつたいのう御座りま

す、何うかこればかりは納めて下され」
乙「いへ〳〵、嫁御、そんな心配はさつしやるな、なんの僅の金じや、どうか之れで線香でも買つて佛様にあげて下され」
嫁「いへ〳〵、これ許りはもらひませぬ、そんな事をすれば罰が當ります、何うかをさめて下され」
斯うして、嫁は返さうとする、借金取は香典をやらうとする、兩方から爭つてゐます、それを二階にかくれて聞いてゐた勘右衛は、その香典を妻が返さうとするのがくやしくてたまりません、取つておけばいいのにと一人で心をあせつてゐましたがしまひには二階から少し首を出し「かゝあよ、もらつておけ、もらつておけ」
小さい聲で合圖をしますがなか〳〵妻には通じない。
「もらつとけよ、こら、もらつといていいよ、下さるものは遠慮せんでよか、もらつとけ、こら、もらつとけ」

勘右衛の首がだん〳〵二階から出てきます、そして聲が高くなります、それでもかゝは氣づかんらしく、
「いいへ、何うして香典なんかもらつたら罰があたります」
妻は一向にもらほうとはしないので、勘右衛は益々氣をあせらして「とつておけ、とつておけ」と言ひなから二階から首を長くのばして下をのぞいてゐる拍子に。手をすべらして二階から眞逆さまに下へ落ちました。
びつくりしたのは借金取の連中です。
「勘右衛の幽靈が現れた」
と言つて走つてにげて行きました。

五十兩

佐志坂には、むかしから古きつねがゐました、そのきつねは婆さんに化けて人をだますことに妙を得てゐました、村の人が佐志坂の古きつねには困まる、何うかして捕へる方法はあるまいかと色々と協議した揚句、佐志坂のきつねを捕つた者には五十兩の金をやると言ふことになりました。

勘右衛は、五十兩のお金を他人にやるのが惜しいのできつねを捕へる工夫をしました。

或る晩方、馬をひいて佐志の坂を下りかけました。

昔は道の兩側には大きな木が生ひ茂つて、晝さへ暗いやうな所でした、勘右衛は淋びしさまぎれに妙な聲をはり上げて都々逸を歌ひながらトロ〳〵と下つてきます、

深いあみ笠、梶原源太　遊女がよひの千鳥足。
肥前鹿島の祐德院さまに　願ひかけましよ二人づれ。

何時のまにか狐の婆さんが後からついてきました。

「婆さんよ、どこへゆかつしやるかの」

一杯きげんとでもいつた調子でいひました。

「あいよ、わつちやのう、唐津の城下までじやよ」

「婆さんよ、お前も若いときあ聲もよかつたらうのう、鶯鳴かせたせつもあつたらうよ、一つ歌つてみちやどうかへ」

「冗談いつちやこまるよ馬方さん、歌なんぞ歌へるものかへ」

そんな話をしてだん〳〵急な下り坂を通りかけます。

勘「婆さんよ、大分な坂じやの、何うかへ、私の馬にのつたら楽に下れますぜ」

狐「おほきに」

勘「遠慮せんでもいい、お錢一文もらふでなし、のらつしやれ」

狐「でもお氣の毒で」

勘「そんな遠慮は要らぬ事じや」

勘右衛は婆さんを遂う〳〵馬に乘せてしまひました。

『道が坂でぐらつくから、動かぬやうに綱で結びつけてやらう』
斯う云ふて、狐の婆さんを馬の鞍に確りと結びつけました。
坂を下りて仕舞つて、佐志の村總代の内に馬を引いて來ました。
『佐志坂の狐を捕へて來た』
勘右衛がさう言つたので、近所の人達が狐を見物に澤山集まつて來ました。
それを聞いた狐、之は大變と思つたので逃げやうとしても綱で締められてゐるので逃げられません、困つた揚句に木の根に化けて仕舞ひました。
見物人は狐はと馬の鞍を見ると狐ではなく木の根が結びつけてあります。
『勘右衛どん、嘘を言はつしやるな、之は木の根で焚物じやないかへ』
勘右衛が鞍の上を見ると成程、狐が木の根に變つてゐる、之は狐が化けてゐるに違いないと思つたので
『みなの衆、之れは決して木の根では御座らぬ、狐が化けてゐるのじや』

勘右衛は連りに辯解しますが他の人は信用しません、そこで勘右衛一策を案じて、『よし、そんならこの木の根が狐であることを皆様へ見せてあげる』と言つて圍爐裡に火を焚いて外の戸を閉めて、火の中に木の根を投げ込みました、狐はあつくて堪りません、ギヤン〳〵言つて外へ逃げやうとするが戸が締めてあります室内を駈け廻つた揚句、丁度佛壇の所の障子が開いてゐて、位牌が二つ並んでゐました、狐は素早く位牌にばけました、そこで位牌が三つになりました。
『狐が位牌に化けたぞ』
皆さう言つて位牌を見ますが、どの位牌が狐か薩張り解りません。
『わしに任せさつしやい』
勘右衛はさう言つて佛壇の前に座りました、人々は、勘右衛がどうして見分るかと片唾を呑んで見て居ります。
『佛様の位はいなら、私がお禮をすれば必度位はい様もお禮をさつしやる、禮をせぬのが狐

の位はいに違ひない』

さう云つて勘右衛が恭しく頭をさげました、するとその話を聞いてゐた狐の位はいは、これは一つお禮をせずばなるまいと思つて、少し前に傾いて來ました。

勘右衛すかさず『この位牌だ』と云つてつかんで庄屋に渡して五十兩の金をもらつて歸りました、それから佐志坂には人を欺すキツネはゐないやうになりました。

やせた馬

勘右衛が、ある日痩馬の安物を一匹買つて來て、鬼塚の伯父の內に引いて行きました、伯父は馬は大へん好きでした。

『伯父さん、馬を引いて來たよ、見ておくれ』

『どれ、どこにをるか』

伯父は外へ出て來ました、すると庭の柿の木にやせたやせた、骨に皮をはりつけたやうにやせた馬が一匹つないであります。

『伯父さんこれです』

勘右衛はそのやせた馬を指さして見せました。

『何だいこんなやせ馬の、何の役に立つか』

伯父は鼻の先であしらつて家の內へは入らうとします。

『伯父さんちよいとお待なさい、斯うやせてはゐるけれど錢糞をたれますぜ、この馬一匹持つてゐたら寢とつても暮されますぜ』

『馬鹿な事を言ふな、馬が錢糞をたれて堪るものか』

伯父は相手にしません。

『では伯父さん、一つ錢糞をたれさして見せるよ』

『うむ、そりや面白い、その馬が錢糞をたれるなら俺が買うてやる』

今度は伯父が本氣になつてやつて來ました、勘右衛は鞭を持つて來て、やせ馬の尻を二つ三つ打ちました、すると馬は痛いのでヒヒン、ヒヒンと叫んではね廻りながら糞をボトツ、ボトツと落しました、勘右衛はその糞を勿体なささうに籠に入て水の中で洗ひました、するとその糞の中からお錢が五枚も六枚も出ます。

これを見た慾ばりの伯父は全く感心しました、欲しいものだ、これ一匹持つてゐたら寢てゐて食つて行けると考へました。

『勘右衛、この馬は俺に賣つてくれ』

勘右衛は心の中で『占めたぞ』と思ひましたがしらぬ顏で

『伯父さん、賣つてもよいがはした金では遣られんよ』

『さうじやらう、幾らで賣るか』

『伯父さんだから仕方がなか、外の者なら三百兩も貰ふのだが、二百兩で負けとこう』

二百兩といへば今日で二千圓以上の値打があるのです、實際金糞たれるなら二千兩でも易い

ものです。

『高いなあ、も少し負けてくれ』

『伯父さん、そりや無理よ、伯父さんはこの馬を一ぴき持つてゐたら遊んでゐて暮されるからな、二百兩の資本でお金は毎日〳〵出て來るのだから之より安いものはない』

勘右衛は容易に負けません。伯父さんは仕方なしに、二百兩の金を工面してやつとそのやせた馬を買ひました。

勘右衛は二百兩をもらつてさつさと家に歸りました。

伯父さんは偉い馬を手に入れたと大喜びで、大事に馬をします、晩方になるともう糞をたれさうなものだと思つて、竹のムチで痩馬の尻を一つ二つ打ちました、馬は前のやうにヒヒン、ヒヒンと叫びながら糞をボトツ、ボトツと落しました。

伯父さんは大切にその糞を拾ひ集めて籠に入れて川で洗つて見ましたが一文もは入つてゐません。

は入つてゐない筈です、勘右衛はやせ馬の尻にお金を五六枚押込んで來たので、出て仕舞つてからはもう出ません。

『今日はもう出んやうじや、明日は出るじやらう』と伯父さんは明日を樂しんでその日は寢ました、明くる朝、伯父は早く起きて馬に糞をたれさせて見ますがお金は一文も入つてゐないさあをぢさんが腹を立てました。

『勘右衛の野郎、俺をだまして二百兩の金を奪ひ取つたな、覺へてゐろ、今に目に物見せてやる』

をぢの顏は閻魔王のやうに眞赤になりました。

『こりや若い者、俺についてこい』

をぢは二人の若者に大きな俵と、繩と、棒を持たせて勘右衛の内に怒鳴り込みました。

『勘右衛をるか、よくもよくも俺をだまして二百兩の金を奪ひ取つたな、覺悟せろ』さう云つて勘右衛を捕まへて、俵の中に押込んで繩でしつかりくゝつて二人の若者にかつがせて西の

濱の海の方へ急ぎます。勘右衛を海の中へ投げ込む積です。斯うなると勘右衛も施す術がありません、愈々今度はお仕舞だ、海の中に投げ込まれて、魚の餌になるのだ、南無阿彌陀佛と一生懸命に念佛を唱へてをりました。

さうしてをる内に時間がたつて、もう晝過になりました、鬼塚から歩んで來てゐるので腹が減つて堪りません、その上に、町中を通つてゐると、旨さうな香がプン〳〵鼻をつきます。

『親方、腹が減つて歩かれん』

『私も腰がくたばりさうじや』

若い二人は遂う〳〵動けなくなりました。

『仕方がない、では晝飯を食うてからのことにしやう』

勘右衛を包んだ俵は海岸に置いて、自分達は飯屋に寄つて御飯を食べることにしました。

勘右衛は俵の中で、しきりに念佛を唱へてゐると誰か杖の先でコツ〳〵と俵をつつく者があります。

「おい、だれだ」
勘右衛は聲荒く叱つて見ました、すると婆さんの聲で
「どうもすみまつせん、私は眼が惡うしてよく見へませんので失禮致しました」
お婆さんがしきりに詫びます。
「お婆さんは眼が惡いかい」
「へい眼が惡うして困つてをります」
「私も眼が惡かつたのでこの俵の中に入つて養生したら立派になほつたよ、この俵の中に入つたら直ぐよくなりますがなあ」
勘右衛はまことしやかに言ひました。
「それじや、この俵の中に入つたら癒りますか」
「癒るとも、この俵に入つたら直ぐ癒るよ」
「では私に一時入らかして養生させて下さりませんか」

「そりや何より易い事、ではこの俵の繩を解いて下され」
お婆さんはその繩を解きました。勘右衛は直ぐにぬけ出て、その代りにお婆さんを入れて、しつかり上をくゝつて仕舞ひました。
「ねえお婆さん、誰か來てかついで行きますよそうして海の中へ投げ込むふりをするからねえ、その時までだまつてをることだよ、そうしたら必度眼がよくなるからね」
「へい〳〵」
勘右衛は旨く逃げて仕舞ひました。
をぢ達三人は漸く晝の御飯を食べて再び俵をかつぎました。
「今度はえらい輕いやうだ」
「いや、今御飯を食べて力が出たから輕いやうな氣がするのじや」
「さうじやらう」
そんな事を話して愈々西の濱の波止波迄來ました。

海の潮は一杯満つてゐました。

をぢ達三人は、遂う〳〵その俵を深い海の中へ投げ込んでしまひました。

お婆さんのお蔭で助かつた勘右衛は、その足で佐志の魚市場に行つて鯖を澤山買つて、他所から籠を借りて魚賣りになり、翌日鬼塚のをぢの所へやつて來ました。

『をぢさん、魚を買ふてくれんかへ』

死んだ筈に思つてゐた勘右衛が魚を賣りに來たのでをぢは吃驚。

『あれは勘右衛の幽靈に違ひない』と思つて寄り附きません。

『をぢさん、勘右衛です、幽靈でも亡魂でもありません、實は淺い所へ投げ込んでくれたので鯖のやうな小さい魚しか捕れんだつた、もつと深い所へ投げ込んでくれたらもつと大きな魚がとれたのに、惜い事だつた』

それを聞いたをぢは、開いた口がふさがりませんでした。

にはさりの巣

龍源寺のうらの松の木に烏が巣をつくつてゐました、若青年の二人が兩方から連りにあらそつてゐます。

「あれは鷹の巣だ」

「ありや、からすの巣だ」

「あんな高い所にかくる巣は鷹にきまつてゐるよ」

「いや、あそこは烏がいつもくる所でな、烏の根じろだよ、だからあの巣は烏の巣にきまつちよる」

どちらも負けないでいひあつてゐます、こそへ裏町の勘右衛がやつてきました、二人が言ひあつてをるので自分も何とか屁理窟の一つもいつてみたくなりました。

「よい、君達の言ふちよることはどちらも違うちよる」
「何んだと、違ふちよる?、そんな事があこもんか、鷹の巣だよ」
「鷹の巣でなかつたら烏の巣だよ」
勘右衛はエヘンとせきをして
「ありやにはとりの巣だよ」といひました。すると二人は一時にふきだして笑ひながら
「にはとりの巣なんて、お前今日はどうかしちよる、にはとりがあんなに高いところへ巣を作りきるかへ、錄に飛びも得ない、にはとりじやないかい」。
といつてまた二人が笑ひました、勘右衛もまけません。
「烏は一羽で卵を生んで子を育てるかへ、そんことあなかよ、ちやんと雄と雌と二羽で卵を生んで子を育てるにきまつちよる、だから二羽鳥の巣だよ」
「お前のいふのはその二羽鳥だつたのかい、わしたちや、地べたにほふてあるく鷄と思ふてゐたのじや」

といひました、勘右衛は「それみろ、二羽鳥の巣じや」といふて自分はさつさと出てゆきました。

獺の皮を賣つた話

勘右衛は獺の皮を一枚持つてゐました、獺は水の中にすんでゐる獸で毛皮は極上等です、俗に之を獺の皮と言ひます。
獺の皮を賣つて金にしやうと思つて唐津町を賣つて廻りましたが何うしたものかさつぱり買手がありません。
困り拔いてゐる所に、向ふから齒醫者が通り掛りました。
「齒ぎし齒固め、齒の療治口中一切」
かう言つて町中を歩いてゐます。

勘右衛はそれを聞いてゐたが、何と思つたかその齒醫者の後について廻りました。

「齒ぎし齒固齒の療治口中一切」

かう言ふ後から勘右衛は

「獺ん皮、うそん皮」

と言つてついて廻ります。

齒醫者は大層怒つて

「こら〳〵、お前のやうにわしが後から嘘ん皮など言つてもらつては誰も齒の療治を受ける者は居らぬ、そんな事は止めてもらはう」と言ひました。勘右衛は

「冗談言つちや固る、わしはウソの皮を賣つて歩いてゐるのじや」

と言ひますので齒醫者もどうすることも出來ません。

齒醫者が幾ら歩いても、「ウソの皮」とやられるので齒の療治を受けるものが一人もありません。齒醫者は困つてしまつて

「そのウソの皮はわしが買はう」

と言ひました。

勘右衛は「占めた」と許りその齒醫者にウソの皮を高々と賣りつけました。

篩を賣つた話

勘右衛が唐津で篩を賣つて歩いたが賣れない、それで魚賣の後について廻つて

「篩、篩」（篩が古いに通じる）

と言ひます、すると町の人は魚が古いのだと合點して誰も買う者がありません。

魚賣は困つてしまつてその篩を買つたと言ふことです。

フルイは百姓さんが米から籾を選り分ける時に使ふものです。

鴨

冬の寒い朝、勘右衛は何かの用事で、鏡の池の下を通つてゐると、池の方でギヤ、ギヤ、ギヤ、と不思議な聲がします、ふと池の方を見ますと、澤山の鴨がゐます、勘右衛は暫くそれを見てゐましたが鴨は翼をバタ〳〵させながらちつとも動かないのです、愈々不思議だと思つてよく見ると動かないのも道理、鴨は二本の足を氷にはりつめられてゐるのでした。

「旨いものを見附けたぞ」

勘右衛は一人で喜びながら池の上の方へ入つて行きました、鴨は驚いて逃げやうとしますけれど足が氷から離れません、勘右衛はその鴨の首をにぎつて引き拔いて腰の帶の間に挾み、一羽捕つては帶に挾みして、其處にゐた二十羽の鴨をみんな捕つて腰に挾んで仕舞ひました。

勘右衛は大喜びで池の中からゴソ〳〵はい上つて來ます、所がどうした機だつたか、岸の所

で勘右衛は足をすべらして倒れました、驚いたのは鴨です、二十羽の鴨が一時に翅をバタ〳〵打ちますので勘右衛はかなひません、丁度飛行機のやうにづん〳〵空の方へ飛び上つて行きました。

山や、川や、家や、村が目の下に見えます、人間が歩んでゐるのが丁度蟻がはうやうに細く見えます。

鏡山の上の方から、鬼塚、相知の方へとんで行きます、大分長くとんでゐる內にもう下へ降て見たくなりましたが、鴨が承知しません、だん〳〵遠くへとびます。

仕舞には勘右衛は恐ろしくなつて來ました。そして上から「助けて呉れ、助けて呉れ」と一生懸命に叫びました。

丁度相知のつゝみの上に來た時、誰か下から「勘右衛どん帶を解かつしやい」かう教へてくれた者があります。

「なる程、帶を解いたらきつと下に落ちるに違ひない」

さう思つたので帶をときました。すると勘右衛は見事に高い空から下の相知の池の中に落ち込みました。

「いや、どうも大變な目にあつた」

勘右衛はさう思ひながらその池からゴツ〳〵はひ上つて來ました。はひ上つて來る時、岸の所で枯木のやうなものをにぎりました、所がそれは兎の足でした、その兎は勘右衛から足をにぎられたので逃やうとして前足で岸の籔の土を掘りました、掘つた所から山芋が八本出てきました、之れは旨いものをほつてくれたと思つてそれを茅のつとに包むつもりで岸の茅を切つて見たらその茅の中に雉が卵を五つ生んでゐました。

兎一匹と、山芋八本と、雉の卵を五つ手に入れた勘右衛は自分の家へ歸りかけました、所が何だか褌の前垂の所が何うやら重むいやうです、不思議だとおもつてちよつと見たら、褌の前垂に小鮒が三升ついてゐたさうです。

深田の狐

鏡山には、昔は澤山の狐がゐたさうです、晩方、人でも通つてゐると、狐の一匹や二匹位は後からついて來たものです。

ある冬の寒い晩、勘右衛は胸に一物を考へて、鏡山の細い道を通りました。すると、まもなく後の方に例の狐がついて來てゐるやうです。

勘右衛は、狐に聞へよがしに獨言で

「今夜はひどい寒い晩だな、こんな寒い晩に下の深田に尻をつけて待つてゐたら、鮒が一升や二升位は集つて來るに違いない」

と言ひました。

後についてゐた狐はそれを聞いて

「はてな、今晩のやうな寒い晩に深田に尻をつけてをれば鮒が一升も二升もとれると言つ

たぞ、旨い話だ、この頃は久しう魚にもありつかぬ、深田に行つて尻をつけてみやう」

狐はさう思つて下の深田に行つて尻をつけて待つてゐました。

夜が更けて來るにつけて、水の冷たさが骨に泌み込むやうです、けれ共、ここが辛抱のしどころだと思つて、一生懸命になつて堪へてゐます。

やがて鷄が鳴いて長い冬の夜も明けて來ました、狐は、もう鰌が二三升位は來てゐるだらうと思つて、ちよいとお尻を上げて見ますと、尻尾が氷にはりつめられてとれません。餘りひどくしりを上げると尻尾が切れさうです、少し位の力では、はりつめられた氷からしりつぽが抜けないのです。

「失策つた、これは勘右衛から欺された」と思つたがもう仕方がありません。勘右衛は、朝早く、大きな棒を持つて鏡山の下の深田にやつて來ました、案の如く古狐が一匹深田に氷からしりつぽをはさまれてゐます。

「見事に俺の罠にかゝつたな」

と一人嬉しがりながら、狐を一撃に打殺す考へで棒を眞向に振りかざして田へゆきます。

それを見た狐は、さあ逃げやうとしますがしりつぽが痛くて抜けません、その内に勘右衛が打落した棒は、どうした機だつたのか、狐には當らんで田の氷に當りました。氷がさん〳〵に碎けましたので、今迄抜けなかつた狐のしりつぽが安々と抜けて、狐は思はぬ命を拾つて「勘右衛、態見ろ」と言ひながら一散に鏡山へ逃げて行きました。

勘右衛は、狐の後を見送つて、茫然と立つてゐました。

鰻

或る時、勘右衛が筑前の福吉の親類へ行きました、手土産に松浦川で獲つた大きな鰻を一尾持つて家を出ました、濱崎を通つて鹿家の山路にかゝると、獵師が狸罠をかけてゐたのに狸が一匹かゝつて苦しんでゐます、あたりには誰もゐません、勘右衛は此の狸を土産に持つて行つ

たら親類の者が喜ぶであらうと思つてその狸を捕つて、その代りに持つて來た鰻を罠にはさんでをきました。

間もなく獵師が來て見ると、思ひがけぬ鰻がわなにかゝつてゐます。

「これは不思議な事だ」

と驚いて、その鰻を持つて歸りました、そして近所の人達を呼んで來て、鰻を見せて今日の次第を話しますと聞いた人達は驚いて

「これは只事ではない、山の神様の使ひかも知れぬ」

と口々に言ひます。

近所に易者がゐたので、占つてもらつたら

「これは山の神様のお使ぢや、早くこの鰻を水瓶に入れて祀りなさい、これが死んでしまへばこの村には必度災難が來る」

と言ふ易者の占でした、之を聞いた村中の人達は大變なことになつたと大騒ぎになつて、

村中の者が集まり、評議の末立派なお宮を建てゝ鄭重にお祭をしました。

「これで漸く安心だ」

村中の人が安堵してゐると、丁度秋の初の二百十日になりました、大風が吹き暴れて田は一面白穂ばかりになりました。人々は

「之は山の神の祟りだ、先達鰻をいぢめたのが悪かつた、鰻大明神の大祭をせねばなるまい」

みんながそんな意見だつたので、村中の人は鰻の大好な蚯蚓を取り集めて神前に供へたり虫供養をしたりしました。

所が神官は御闘をあげて、

「山の神の祟はまだ鎮まらぬ、近い内に大雨がふり、大風がふき、山が崩れて一面泥の海となつてしまふ」

と言ひました。

さあ村の人は大變です、とても自分の仕事をするだんではありません、毎晩〳〵お通夜をして祈願をこめました。

此の噂を傳へ聞いた勘右衛、お可笑くつて堪りません、勘右衛はぶらりと鹿家へやつてきました。

「村中の皆様、山の神の祟は私が引受て鎭めて上げませう」

村中の人達は、豫て知つて居る通り、變り者の勘右衛の事ですから、

「物は試だ、やつて見やう」

と言ふ事になりました。

「では私が引受けました、その代りに、私がどんなことをしてもだまつて居なければなりませんぞ」

と勘右衛が念を押しました、村の者は勿論異存はありません。

村中の人達は、勘右衛はどんなことをするだろと片唾を呑んで見て居ります。やがて勘右衛

は、村中のものが辛苦して作つたうなぎ大明神の玉垣や鳥居を片つ端から打壞し初めました、人々はあまりの事にあいた口がふさがりません。

勘右衛はだん〳〵仕事が手荒になつて來ます、玉垣や鳥居を薪にして神殿に火を付けました、人々は青くなりました、けれども勘右衛に對しては何とも言ふことが出來ません、それは最初からの約束ですから。

勘右衛は水瓶の中からうなぎの神体をつかみ出しました、そして背割をして、寸々に切つて之を竹の串にさして火の中にあぶりました。

村中の者はみんなどんな事になるかと恐れながら一心不亂に聲をあげて拜みました。

勘右衛はそのうなぎを肴にして神酒を飲んでしまひました。

「もう之で大丈夫で御座る」

と言つて勘右衛はさつさと唐津へ歸つてしまひました。村の人々は、どんな事になるだらうと不安恐怖の念は一層烈くなりました。けれども、その日も、その次の日も何事もありません

、三日經つても十日經つても無事です、一月たつても二月たつても。
村の人々は漸く安心しました。
「勘右衛の荒業で不思議に災難を逃れた」と言つて、村中打揃つて勘右衛にお禮に行つたと言ふことです。

不思議な棒

ある日、勘右衛は丈高山に行つて六尺程の樫の木の棒を作つて來ました、その棒を持つて大石町を通りかゝると、道の眞中で十四五人の若衆達が喧嘩をやつてゐるやうです、勘右衛は此處だと思つて、ヒヨヒヨラヒヨン、と言ひながら苦衆達の中に入り込んで持つてゐた六尺の樫の棒を一生懸命に振り廻しました、若衆達は堪りません、その棒に當つて怪我しそうですから喧嘩をやめてしまひました。

其處を通りかゝつた和多田の蓮生寺の和尚が遙かにこの樣子を眺めてゐられます。
勘右衛は和尚の側へ行つて
「和尚さん、御覽になりましたか、この棒こそ世にも不思議な棒で御座ります、ヒヨヒヨラヒヨンと言つて振り廻すと、喧嘩があつてをれば直ぐにやむし、盜賊がゐたら直ぐにげて行きます、火事があれば直ぐ消えます、何と不思議なぼうでは御座りませんか」
勘右衛はまことしやかに言ひました。
現に只今、勘右衛がぼうを振り廻したが最後、直ぐ喧嘩がやんだので和尚さんも非常に感心して
「私も此處から見てゐた、誠に不思議な棒じや」
とほめました。
「和尚さん、さうお氣に召したなら五十兩でお譲りしませうか」
和尚さんも何だか欲しくなつて來ました。

「勘右衛、私が使つても利くかどうか試した上で買うことにしやうから、暫く貸して呉れ」
とお仰りました。
「へい何うぞ使つて見て下され」
和尚さんは勘右衛から、そのぼうを借りたので、一つ試してみやうと思つて、ある日お寺の本堂の邊に菓子を置いてゐました、するとそこの近所に遊んでゐた子供がやつて來て盗んで食べてゐましたので、和尚今ぞと思つて本堂に出てヒヨヒヨラヒヨンと叫びながらぼうを振り廻しました。
子供は和尚さんと木のぼうを見た許りで逃げてしまひました。
「これは愈々利き目がある、これさへ持つてゐたら大丈夫だ」
和尚はさう思つたので五十兩を勘右衛にやつてそのぼうを買ひました。
和多田の蓮生寺は、本堂の方はなか〳〵立派なお寺でしたけれど、住職の住家の方が長く修繕もしてないので粗末でした、和尚は以前から檀家の人達に修繕をしてくれと頼んでも、なか

〳〵して呉れません、そこで和尚は一計を考へて、こんな粗末な住家は燃やしてしまへ、本堂の方にさへ燃へ移らねばよいと思つて或る晝、和尚自ら住家の方に火をつけました。
火は猛烈に燃え上つて來ます、近所の人々は驚いてかけつけて、
「和尚さん、火事じや、大變なこつじや」
他の者が騒いでも和尚はちつとも騒ぎません、唯六尺の樫のぼうをにぎつて何か待つてゐる樣子です。
その内に火は益々盛に燃え上つて、住職の住家はみんな燃えてしまつて今や本堂の方に燃ゑ移らうとしました。
蓮生寺の和尚、此處ぞと思つて、ヒヨヒヨラヒヨンと叫びながら、例の六尺の棒をビユウ〳〵と振り廻したが更に利き目はありません、その内に火は遂う〳〵本堂に燃え移つて、お寺はみんな灰になつてしまひました。
「あの和尚さんは氣狂になつたらしい」などと人が話してゐました。

その時の火事以來、蓮生寺は再び建立が出來ませんでしたが、それで今でも蓮生寺は和多田に建つてはをりません。

勘右衛の家

勘右衛が相知の方に行つて歸る途中の事です、丁度鬼塚の瓦橋の茶屋で休んでゐますと、何でも畑島、山田の人達が濱崎のお諏訪様詣りしたらしく、歸る途中この茶屋で休みました、勘右衛はその若い連中を一つ欺して見たくて仕方がありません。

「若い衆達、今日はお諏訪様參詣だつたのか」

「さうよ、百姓の田植が濟んでなあ、體休めに參詣して來たよ」

「序でに私の内に廻つて來たかい」

「お前さんの内なんて聞いたこともない」

「わしの家を知らんかい、大石町だよ」

「どんな家かい」

「それはたいしたもんだぜ、俺の家は豹の皮で葺いてゐるからなあ」

「へえ、豹の皮、そりや偉いもんだねに」

「その上を五万の瓦で葺いてゐる」

「五万の瓦、それは吃驚するなあ」

「まだ珍らしいものがあるぜ」

「それはなに？」

「十八里の山芋もあるし、十里のかづらもある」

「それは珍らしい事じやなあ」

「まだある、裏には三斗蒔の畑がある」

「三斗蒔の畑、それはまたどんなに廣いだらうな」

「見たいなら見せてやろうよ」
甲「おい、このお方の家は大したもんだねえ、五万の瓦、豹の皮、十里のかづらに十八里の山芋、三斗蒔の畑、何うだ見たくないか」
乙「見たいなあ」
丙「今から見に行かうじやないか」
甲＝それもいい。
乙＝じや行かう。
其處にゐた仲間はみんな引返して勘右衛の家を見にゆくことになりました。
瓦橋から唐津まで一里はあります、唐津の勘右衛の家に行くとそれは〳〵粗末な家でした、とても五万の瓦でふいた家でもなければ豹のかはでふいた様子も見へません。
「勘右衛さん勘右衛さん、どの家ですかい五万の瓦を使つてふいた家は。それから豹のかはでふいた家はどの家ですかい」

「それはお前さん達の聞き違いじや、五万の瓦じやない、ゴマのカラ（胡麻の殼）じや、見なさい、胡麻の殼でふいてあるじやらう」
「それならへウのかはでふいた家は」
「そら、俵の俵です、俵でふいてあるじやらう」
成程、小さな掘立小屋で上には古俵でふいてあり、胡麻のかはでふいたりしてあつたのです。
「では十里もあるカヅラは」
「それはこれです、烏瓜ですな、これが二つなつてをるから合せて十里」
「十八里の山芋は」
「裏にある山芋でクリ、クリ（九里）と曲つてゐるから二九の十八里ですね、だから十八里の山芋です」
「三斗蒔の畑は」
「これを見さつしやい、この畑には一度蒔いても大根が生えぬ、二度蒔いても生えぬ、三度目

にやつとこの大根が生へた、だから三度蒔じや」
勘右衛について來た若衆達は「なんだ馬鹿を見た」と言ひながら再び瓦橋の方へ歸りました。

小さい牛の子

勘右衛が、道で馬喰の圓作に出逢ひました、圓作はこの頃は不景氣と見えて小さい牛の子を一ぴきひいてゐました。
勘右衛はその牛の子を見て、何と思つたか、例のにこ〳〵顏で
「圓作どん、偉い小さい牛の子じやのう、私のキンタマよりも小さいぜ」
と言ひました勘右衛のキンタマは水キンタマと云つて膨れて大かつたさうです。圓作は少し氣短かい男でしたから直ぐに腹を立てゝ
「馬鹿なことを言はつしやるな、幾らお前のキンタマが太いと言つて牛の子と比べになるもん

か」と言ひました。勘右衛は負けて居ず
「そんなら圓作どん、此處で言ひあつても役に立たぬ、今から唐津の町に行つて外の人から見てもらはう、俺のキンタマが太かつたら町の人は太いキンタマだと言はうし、お前の牛の子が太かつたら大きな牛の子と言つて感心する筈だから」
と言ひます、圓作も負け嫌ひの男でしたから「よし」と一口で承知しました。そしてその儘唐津に出かけました。
勘右衛は道で
「圓作どん、わしが負けたらわしのキンタマはお前にやることにして、わしが勝つたらその牛の子はわしが貰ふぜ」
と言ひました。
「それは面白い」
圓作は男らしく承知しました。

そんな話をしてゐる内に唐津の町に來ました、勘右衛はしりをまくりあげて褌の間から大きなキンタマを出して知らぬ顔をして先きに行きます、圓作はその後から牛の子をひいてついて來ます。

町の人達は勘右衛の大キンタマに氣が附いて指でさしながら

「あれ見ろ、大きなキンタマだなあ」

かう言つて感心して賞めます、それから、圓作が引いてゐる牛の子を見て

「あの牛の子の小さいこと、可愛いらしい」

かう言ひました。

勘右衛は

「そら、圓作どんあの通りだ、わしのキンタマは大きいと言ふがお前の牛の子は大きいと言ふ者は一人もをらん、だからわしのキンタマが大きい、その牛の子はわしのものじゃ」

かう言つて遂うとうその牛の子を勘右衛がとつて仕舞ひました

雉

勘右衛が、ある日裏の山にある畑で仕事をしてゐますと、山の中で何かバサ、バサと音がします、勘右衛はぢつと見ますと、狐が大きな雉を地面に埋めで、落ちた葉を被ぶせてゐるのです

「ははあ、狐の奴あそこへ雌を隠してゐるのだなあ」

勘右衛はさう思ひました。

まもなく、狐は何處かへ行つて仕舞ひました。

勘右衛は、狐が行つた後から、其處へやつてきて、柴をとりのけてキジを掘り出しました、大きなキジでした、それを自分の内へ持つてかへりました、

「おい、嬶よ」

「何かへ」

「これを見ろ」
「大きなキジねえ、どうして取つたの」
「狐が山の中に隠してゐたのを盗んで來たよ」
「まあ」
嬶は感心して、そのキジを庭の眞中に吊り下げてゐました。
一方では狐が、晩方になつたので、隠してゐたキジをばんの食物にしやうと思つてとりに行きますとキジがありません。
「おや」
狐は驚きました。
「誰れか盗んだに違ひない、誰かしらん」
連りに考へてゐます、すると狐は、晝、下の畑で勘右衛が仕事をしてゐたことを思ひ出しました。

「どうかしてかたきを打つてやらう」
狐は一生懸命になつて考へました。
「よし」
狐は考へついたらしく、自分は村の庄屋さんに化けました。
日はもう立派に暮れました。時分はよしと狐は思つて、庄屋に化けて、社祢を着て、短かい刀を腰に差して勘右衛の内に行きました。
「勘右衛、勘右衛」
「へい、どなたで御座りますか」
「庄屋じや」
「左様で御座りますか」
勘右衛は畏まつて庄屋の前に來て挨拶をしました。
「時に勘右衛、お前は雉を取つたといふ話だが本當か」

「へい、今日裏の山に狐が穴を掘つて隠してゐたのをとつて來ました、これで御座ります」
勘右衛は庭に下げてをる雉を指さして見ました。
「大きな雉じやのう」
狐の庄屋は憎い奴だと思ひましたがそしらぬ顏で
「時に勘右衛、ちと相談があるがね、聞いてくれまいか」
「へい、それはお庄屋様のお仰やることで御座いますから、私が出來ることなら何んな事でも致します」
「實はね、明日私の內に代官様がおいでになるのじや」
「左様ですか、それは結構な事で御座ります」
「所がねえ、折角代官様が來て下さるのに私の內では何の御馳走もないのじや」
「何ういたしまして」
「それでお前の今日取つた雉を私に讓つてくれないか」

勘右衛は一寸困りましたけれどお庄屋様のお仰る事ですから仕方ありません。
「へい、そりや、お庄屋様のお仰ることですから。へい」
「その代にね、わしの內には兎を何匹も持つてをるから大きいのを一つ上る」
「それには及びませんが——」
狐の庄屋は旨く勘右衛を騙してキヂを持つて歸りました。
勘右衛は、キヂは庄屋にやつたけれど、その代に大きな兎を貰つたので、その晩皮をはいで煮て食べました、そして手や足や皮や頭等は、前の塵だめへ捨ておきました。
明日になつて、お隣の佐次平さんが何かの用で勘右衛の內にやつて來ましたそして庭先の塵だめを見て驚きました。
「勘右衛どん、お前の內にはゆふべ大猫の死んでゐたのを食てはゐないかい」
「ゆふべはお庄屋さんから貰つた大兎を食べたよ」
「嘘よ、先日向ふの川ばたに捨ててあつた野良猫だよ」

「いいへ、大うさぎだよ」
「でもこれを見て御覽、これは正しく川ばたに死んでゐた野良猫の首だ、そら赤白黑の三毛だよ」
勘右衛は一目見て吃驚しました、ゆうべうさぎと思つて食べたのは野良猫だつたのです、さう言へば先日から川ばたに死んだ猫が一ぴき轉んでゐたのです。
「うむ殘念だ、ゆふべ來た庄屋は狐にちがひない、庄屋に化けてキジを奪ひ返しに來たのだなその代に腐猫を俺に食はせた、畜生、仇討をせずにおくもんか」
勘右衛は眞赤になつて怒りました。
「よし、今に見ておれ」
勘右衛は鍬を持つて、早速後の山に行きました。
その山には、大きな狐の穴があります、其穴の中に狐の一家族が居るのです、
勘右衛は、持つて來た鍬で、その穴を片つ端から掘り崩しました。

「畜生、お前達の穴を掘崩して仕舞ふぞ中にゐる狐はみんな撲ち殺してしまふからさう思へ」
額から玉のやうな汗を流しながら勘右衛はせつせと穴を掘り崩しました。
狐の一族は困りました、この穴をほり崩されたら、明日からは寢る所もない、何うしたものかと大變心配しました。
親狐は色々考へた揚句、子狐を三四ひきよんで、
「お前達は此方の穴から出て――――」
何とか智惠を敎へてやりました、子狐達は親狐から習つた通りにして勘右衛をだまさうと勇み立つて出て行きました。
暫く經つてから、向ふの方から簞笥と長待を擔いで、ヘッシ、ヘッシ、ヘッシ、ヘッシ、と汗をたら〳〵流して來る人があります。
勘右衛がゐる近くの所まで來ると、その荷を下ろして汗を拭いて暫く休んでゐる樣子です。
「ようい、勘右衛どん」

勘右衛はちよいと鍬を置いて
「おうい、何かい」
「何してゐるかね」
「俺は狐から騙されたからその仇討をしてをるよ」
「今日はお庄屋さんの内に祝儀があるのを知つてをるかい」
「知らんよ」
「これを見んかい、簞笥と長持だ」
「偉いものだらう」
「今からその祝儀だよ」
「さうかい」
「お前も祝儀に來ないかへ」
「來られぬよ、仇討だから」

「來たらどうかへ、お前の大好のお酒は飲みあきだよ、四斗樽は何丁も据えてあるからなあ」
「酒は大好じやがしかたなか」
「俺はどうも肩が痛んでこの簞笥が擔げんのじや、勘右衛どん、濟まんが加勢してくれないかへ」
「困るなあ」
「賴むよ、お前でなくちやとてもこんな荷物は擔げんよ、中には上等の着物が澤山は入つてゐるしね」
「……」
「さうだつた、お庄屋さんはお前に、ところは高砂のといふ謠をやつてもらひ度いつて話してをられたよ」
「さうかい」
「本當だよ」

『今日に限つて困つたなあ』
『そんな事言はずに來ておくれよ』
『狐の仇討もしたしなあ』
『それは又の事にしてよいじやないか』
『では仕方がない、來ることにしやう』
勘右衛はとう〳〵鍬を投げ捨てて簞笥を搗いでギシ〳〵やつて庄屋の内に行きました。
庄屋さんの内は大混雜です。
勘右衛はお謠を歌はねばならぬと言はれて一生懸命に『所は高砂の、尾上の松も年ふりて――』
稽古をしてゐます。
『勘右衛さん、お風呂に入つて、髭でもそつて下さい』
おたんどんが言ふて來ました。
成程それもさうだと思つて、勘右衛は風呂に入りました、そして、風呂の中で謠を稽古しなが

ら剃刀で髭を剃つてゐます。
其處へ勘右衛の友達の、隣にをる佐次平さんが通りかゝりました、勘右衛を見ると驚きました
道端の肥料桶の中には入つて、しきりにあごの邊をなでながら謠を歌つてゐます。
『勘右衛どん、お前のその態はどうか、肥料桶の中には入つてゐるじやないか、早く上らにやいかん』
佐次平が教へてやつても自分がそれが肥料桶とは思つてゐません、全く風呂に入つてをると思つてゐます。
『俺あ風呂に入つてをる、今夜庄屋さんの祝儀にお謠を歌はねばならぬから』
かう云つて平氣でゐます。
友達の佐次平は勘右衛が餘りおかしなことをしてをるので
『ははあ、これはひよつとすると狐からだまされてをるな』と思つたから、あたりを見廻したら、あんの如く、後の籔の中に狐が何匹もゐました。

「この狐だ」
佐次平はさう思つて石を投げてやりました、すると狐は驚いてキャン〳〵と叫びながら逃げて仕舞ひました。
勘右衛は漸う〳〵自分にかへりました、と自分は田圃の中の肥料壺の中には入つてゐました。臭くて堪りません。
「又狐から騙された」これも俺が最初狐の雉を盗んだからだ」
勘右衛はさう思つて諦めました。

そりや嘘じや

龍源寺の御隠居は、なか〳〵話好でした、勘右衛は近くでもあるし、よく御隠居の處へ出掛けて話をしたものです。
或る時、何かの都合で一ケ月許りお寺に行かないで、その揚句にひよいと御隠居の所へ行きま

した。
『勘右衛、久し振りに來たな、偉う淋びしかつたよ、今日は一つゆつくり話を聞かう』
御隠居は持つてゐた竹箒を置いて椽に腰を下しました。
「御隠居、あなたに話をするのは厭です」
「何故？」
「何故つて、私が折角面白い話をすると、御隠居は直ぐ嘘だ〳〵とお仰しやるじやありませんか」
「成程、それは私が悪かつた、もう之からお前がどんな話をしても決して嘘だとは言はんよ」
「お隠居、では決してそりや嘘だとはお仰しやりませんな」
「言はんよ、では斯うしやう、若し私がそりや嘘だと言つたら五十匁のお金をお前にやることにしやう
「御隠居、そりや本當ですかえ」

「本當だとも、お前がさう疑ふなら此處へ五十匁の金を置くことにしやう、そして、私がそりや嘘だと言つたら、その五十匁を持つて歸らつしやい」

御隱居は五十匁のお金をお盆の上に載せて右衛の前につき出しました。かうなると、右衛も一生懸命です。

「では話しませう、えゝ、私はこの間筑前の太宰府參詣に行きました、丁度その時筑前の殿樣が御參詣になつてゐました」

「さうかい、それは大した見物が出來たのう」

「そりや見物でしたよ、流石五十万石の大殿樣ですからな、飛ぶ鳥も落すやうな威勢で御座ります」

「さうじやらう」

「殿樣は馬上からいろ〳〵號令をお下しになると、澤山の家來達は、みな殿樣の號令通りにします」

「もつともじや」

「殿樣の長の道中で、お召の着物に埃がつきました」

「成程」

「そこで殿樣は、お召換——と號令をかけられますとお側に附いてゐた家來が早速埃の着いた殿樣の着物を脱がせて、立派な着物を殿樣へお着せ申しました」

「その筈じや」

「それから暫くすると、一羽の鳥が丁度殿樣の眞上に飛んで來ました」

「さうかい」

「所が運惡くその鳥が糞を落しました」

「その糞は何處へ落ちたかへ」

「それが丁度殿樣の冠の上に落ちたんですよ」

「それは怪しからん、でもそんな事もあらうのう」

「そこで殿様が號令をかけられます」
「何んな號令をおかけになつたかへ」
「首の切かへつ、と殿様が號令をかけられると、側にゐた家來が刀を拔いて殿様の首をハツト切落して、新らしい首と代へます、すると殿様は忽ち若殿様に早替をされました」
「勘右衛、そりや嘘だ」
御隱居は思はずそりや嘘だと云つて仕舞ひました。
「御いん居、とう〳〵お仰たな、では約束通りにこの五十匁のお金はもらひます」
勘右衛は五十匁をにぎつてさつさと歸りました、御いん居は後から氣づいたのですが何とも仕方がありませんでした。

富士山より高い山

これは勘右衛が何でもまだ十二三の時でした、同年輩の者が七八人集まつて話してゐた時、誰

かが日本一の高い山は何山だらうと言ひました、その時分は未だ新高山は日本のものではありませんから矢張り富士山です。
「そりや解つとるよ、富士山だよ」
と言ひました。
すると勘右衛が
「いや未だ高い山がこの近所にある」
と言ひました。
「馬鹿なことをいふな、日本一の高い山は富士山に定まつてをる」
「いいや未だ外にある」
二人は兩方から言ひあひました。
「そんなら、その富士山よりも高いのは何といふ山か、言つて見んか」
かう言はれて勘右衛

「そりや鏡山だ」
「なぜか」
「鏡山はかがんで（蹋の意）でゐるから低いがな、あれが立つて見ろどんなに高いか知れんぞだから鏡山が一番高い」
「何だい馬鹿〳〵しい」
其處にゐた七八人の仲間は一時に笑ひました。

鰌汁

稲刈が濟むと、百姓達は一寸一休します、若者衆達は、田の溝を堀つて鰌を捕へて味噌汁をして酒を一杯飲んで秋のつかれた体の骨休をするのが田舎では樂しみの一つです。
晩方、勘右衛は豆腐を一丁買うて歸つてゐますと、丁度其處へ村の若い連中が四五人田から鰌を堀つて若者宿の方に歸つてゐるのに出逢ひました。

若い連中は、勘右衛が豆腐を一丁提げてゐるのに眼をつけて、勘右衛も仲間に入れて、あの豆腐を出させやうと考へましたので
「勘右衛どん、今から俺共は鰌の味噌汁で一杯やるのじや、何うかへ今日は仲間入をしては鰌は澤山捕れたよ」
「さうだ、今日は思ひの外鰌が澤山捕れたよ、勘右衛どん、仲間にはいつては何うかへ」
さう言つて勸めます。
勘右衛には、直ぐ若者連中の心が解つてゐます、よし、一つ困らしてやらうと思つたので
「じや俺も暫くかたせてもらうことにしやう、けれど今日はすぐ歸らねばならぬから私は途中で早く歸るか知れんからと言ひました。
「そりやお前の勝手だ」
さう言つて暫く仲間入をしました。味噌すりが始まる、午蒡洗が始まる、火起し、と分業でさつと仕事が捗ります。

若い連中は、勘右衛が豆腐を一丁持つて來たので、よい鳥が飛んで來たと心には大喜びです。
愈々味噌汁が出來ました、勘右衛は豆腐を竹の皮で包んだ儘鍋に入れました。
味噌汁は煮へてゐますが豆腐は大きいのを今入れた許りですから冷たい、鮠はみんな豆腐の中へもぐり込んで仕舞ひました。
勘右衛は
『俺はちと用があるから歸る』と云つて鍋の中の豆腐を竹の皮で包んだ儘、上げて持つて行きました。
後で若者連中は鮠の汁を吸ひましたが何うもおかしい。
『俺の汁には鮠は一匹もゐない』
『俺の汁だつて一匹もゐないぞ』
誰の汁にも入つてゐません、勘右衛の豆腐の中に潜り込んでしまつたのです。
『ちえ、馬鹿な目にあつた、勘右衛の豆腐の中に潜り込んでしまつた

馬鹿な目にあつた』
若者連中は口惜しがりましたが何うすることも出來ませんでした。

聲かけてくれ

勘右衛の内の隣に、神主さんが居ました、勘右衛が明日お諏訪様詣りにゆくときいて自分も連れなんで行かうと思ひ立ちました。
この神主さんは至つて朝寝するお方でしたから起き損なつては困ると思つたので
『勘右衛、わしも一緒に行かう、じやがわしは知つての通りの朝寝坊じや、お前朝早く起きて聲かけてくれ』
と言ひました。勘右衛は早速承知して
『へい〳〵こゑかけて上げます』と返事しました。
神主は翌朝目を覺ました所がもう遲い、お太陽様は高く上つてカン〳〵照してゐます

一、勘右衛にあれ程頼んでゐたのに何故起して呉れなかつたのかしらん、大低しれたもんだ」
大變に怒りながら外へ出てみますと何故か變な臭がします。何故だらうと邊を見廻すと臭いも
道理肥料を屋敷一杯に振り蒔いてゐます。
「誰がこんな惡戯をしたのか」と怒つてゐる所へ勘右衛がお諏訪様を參詣して歸つて來ました
「神主さん、お眼がさめましたか」
神主は勘右衛を見ると眼を圓くして
勘右衛、お前はあれ程頼でゐたのに何故今朝は聲をかけてくれなかつたか、」と言つて怒りま
した。
「神主さん、昨日頼まつしやつた通り、今朝早く來て肥料をかけておきましたよ」
と言ひました

法螺吹三人

唐津の勘右衛が法螺吹の名人だと言ふことが肥前、肥後の邊まで評判したと見へまして、る
日肥前からと肥後からと二人の法螺吹が唐津勘右衛を態々尋ねて來ました。
三人は小さい火鉢を中に圍んで話を初めました。
先づ肥後の男が
「肥後はな、百万石の大藩で)ぼつ〳〵話が大きくなります。
(その藩の眞中に大きな楠があるる、その楠は非常に榮えて、人間達はその楠の下で日を
暮らして行くのじや、何と大きい話じやないか)
と言ひました。
次に肥前の法螺吹が
(私の國には、大きな牛がゐてな、佐賀の廣田原の草を端から端まで食ふのじや、之も大きい
話じやないか)
と言ひました。

最後に勘右衛

「唐津は小藩じやが珍らしいものが一つある、それは太皷じや、この太皷の皮は肥前の大牛の皮で、その太皷のバチは肥後の楠の大木で作つたもので、その大ばちは大ぼらの意）で打つと言ひました。

金の茶釜

鏡山に一匹の古狐がゐました、人がおさん狐と名をつけてゐました。

近所の人が唐津供日の歸りなどに、土産でも提げて鏡山の麓を通るとそのおさん狐が屹度やつて來て、その人達を騙して土産をとりあげて食ふのです、それで近所の人は大變に困りました。勘右衛は、一つおさん狐をいましめてやらうと思つて、ある日、自分は態と盲目の眞似をして、左の手に一匹の鯛をさげ、右手に杖をついて、コツ〳〵やつて鏡山の麓を通りかゝりました。するとまもなく、後の方から人の足音がします。

「ははあ、來たな」

勘右衛は心の中に思ひましたが氣附かぬ振をして杖をコツ〳〵やつて歩んでゐます。

すると後から

「もし、もし、もし」

優しい女の聲がします。

「何かへ、私に用事かへ」

勘右衛は矢張り盲目の振をして後を向きました。

「どこへお出になりますか」

「ちよいと、その邊までだよ」

「では私もおともさせて下され」

「じやあ娘さん、すまんがわしは眼が見へんでのう、お前先きに行つてくださらんか」

娘のおさん狐は見ると盲目ですから「旨い、この男なら本當に化けんでもよい尻尾位ぶらさげ

てゐても大丈夫」
と考へましたから尻尾はそのまゝぞろ〳〵地に引づつてゐます。
「では私が先に行きませう」
狐のおさんが尻尾をぞろ〳〵さしてゐるのでお可笑くて堪りません。
勘右衛はおさんを一つ困らして遣らうと思つて、右の足で、狐の尻尾を踏んでやりました、
狐は痛くて堪りません。
「もし、もし、ちよいと、右の足をふみかへて下され、右の足をふみかへて下され」
勘右衛は知らぬ振して
「早う行かつしやい、早う行かつしやい」
斯う言ひました。
また暫く歩んでゐる内に今度は又左の足で尻尾を踏んでやりました。
「あ痛つ、左の足をふみかへて下され」

おさんは又さう言ひます歩んでをる内に、道端に大きな岩が一つありました、もうよからうと勘右衛は思つたので、不意におさんの襟首を引掴んで、二三度岩に打附けました、不意にやられたから堪りません、おさんは
「あ痛い、あ痛い、」
と泣きます。
「畜生、俺を誰と思ふか、裏町の勘右衛つてな、これでも若い時は相撲でもとつた男だ貴様が此處を通る人を騙して困ると言ふ話だつたから俺が撲殺に來たのだ、覺悟せろ」
それを聞いておさんは吃驚。
「勘右衛さん、何うぞ命だけは助けて下さい、命だけは助けて下さい、そのお禮にはどのやうな事でもします、命だけは助けて下さい」
おさんは泣いて願ひます。
「では俺の言ふことはどんな事でも聞くか」

「へい、あなたのおつしやる事ならどんな事でも聞きます」
勘右衛は暫く考へてゐましたが
「では金の茶釜になつて見ろ」
「へい、そりや何より易い事で御座ります」
おさんは柴の葉を拾つて体を四五度なでますと自然と丸くなつて立派な金の茶釜になりました
「こりや立派なもんだ」と勘右衛も感心しました。
勘右衛は、その茶釜を大事さうに風呂敷に包んで、妙法寺の和尚さんの内に行きました。
「御免下され」
「誰かい」
「勘右衛で御座います」
「まあ勘右衛どんかい、よう御座つたのう、まあ煙草でも一服のみなされ」
和尚さんは出て來て勘右衛を親切に應待します。

「そして何か用があるのかい」
「へい、ちと相談に參りました、へい」
「さうかい、そしてその相談といふは」
「へい、貧乏世帶は要るものはお金許りで御座りまして、年の暮も近づきますし、借りた金を何時までも返さぬ譯には參りませんし、私は此度といふ此度は大奮發をしまして、借金をすらつと拂ふ積りにしました」
「そりやいい考へ、借金といふ奴はなあ、利が利を生んで殖へるものだよ、そりやいい分別、そしてその、借金を拂ふ手だては」
「それで御座います、實は私の内には先祖代々傳つた寶物が一つあります、それをこの際ですから安く賣つて、そして借金を拂ひ度いと思ふてをりますが」
「はあ、寶物、そりや一体何かい」
「へい、これで御座ります、金の茶釜で御座ります」

勘右衛は叮嚀に風呂敷の中から金の茶釜を出して見せます、それは〳〵立派なものです、黄金色がピカ〳〵と光つてゐます。

「勘右衛、こりや大したもんだ」

和尚は全く感心して仕舞ひました。

「これをあなたが買ふて下されば、思ひ切つて安くお譲りしたいと思ひます、之を他所の金持に賣つたといふよりも、矢張り先祖様の靈のゐらつしやるお寺に上げれば先祖様も幾らか心持がよからうと思ひまして、へい、和尚さんにお譲りしたいもので御座りますが――」

和尚さんは金の茶釜が欲しくて堪りません。

「一体どれ位で譲つてくれるかい」

「へい、他人へなら三百兩も貰ふので御座りますが、あなた様なら、百兩、へい、百兩頂けばよろしう御座ります」

百兩といつても、今の百圓と違います、今の千圓よりももつと値打があるのです。

「百兩」

和尚さんは茶釜が欲しくて涎を流してゐます、けれども百兩の金も惜しい、何うしたもんかと暫く考へてゐましたが、斯う言ふ寶物は金で買はれぬもの、子孫代々傳へて寶としたいと思つて遂う〳〵買う氣になりました。

「じや、わしが譲り受けやう」和尚さんは百兩の金を揃るのに近所近邊から借り集て漸う〳〵出來ました。

「有り難う御座りました、ではこの金は私が頂きます」

勘右衛は百兩の金を握つてドン〳〵走つて歸りました。

和尚さんは、稀代の寶物を手に入れて大喜びです。翌る日のことです。「小僧、この金の茶釜を下の川で洗つて來い」小僧は和尚様の大切な寶物ですから、腫物にさわるやうにして下の川へ持つて行きました、そして石を拾ふて、金の茶釜を磨きかけました、石で磨かれては堪りません、茶釜の狐は餘程痛かつたとみへて

「小僧小僧、そろつとこすれ、そろつとこすれ、ひどうこすれば怪我するぞ」
物を言ひました、小僧は驚きました。
「おや、この金の茶釜は物言ふぞ」
この事を走つて和尚さんに話しますと和尚さんは笑つて
「馬鹿な事を言ふな、茶釜が物を言ふて堪るもんか」
和尚さんは相手にしません。
「本當です、本當に物を言ひます」
小僧はさう言ひ張ります、そこで和尚さんは
「よしでは俺が來て見やう」和尚さんの前で前の通り石で磨きますと矢張り物を言ひます。
「小僧小僧、そろつとこすれそろつとこすれ、ひどうこすれば怪我するぞ」
和尚さんも吃驚して
「こりや怪しからん、小僧茶釜に水を一杯入れて來い」

小僧は和尚様のおつ仰る通り茶釜に水を入れて行く。
「それを鉤に掛けて下から火を焚いて見ろ」
小ぞうはその通り火をたきつけました。茶釜の狐は困りました。あつくて堪りません、苦しさに茶釜が長くなつたり短かくなつたりします。
「奇妙な茶釜だ」と和尚さんは見てゐられました、火がだん〳〵燃へ上ると狐は愈々堪へ切らず狐の正体になつてキヤン〳〵と叫びながら裏の山へ逃げて仕舞ひました。
「こりや大變」和尚さんにとつては大變です、百兩の金が掛つてをります。
「畜生、勘右衛が俺をだました」
和尚さんは怒ること怒ること、眞赤になつて、額には山蚯蚓のやうな青筋を立てて勘右衛にどなりこみました。
「勘右衛をるか」
和尚さんは戸をがらりと開けては入りますと中は靜かなものです。

「勘右衛をるか」和尚さんは狂人のやうに叫びますと、奥の方から力のない聲で
「どなた様でございますか」
幽靈の言ふやうな聲です。
「おれだ〳〵、お前は昨日ようも〳〵俺をだまして百兩の金を奪つたな、さあたつた今百兩の金を返せ」
さう言ひながら板張の上に上つて行きますと、勘右衛はふとんの中に寢てゐます、枕元には藥瓶や藥などを澤山置いてゐます。
「おい〳〵勘右衛、何うした」
「わたしや、もう十日前から體の具合が悪うして寢てばかりをります」
如何にも苦しさうにうめきながらさう言ひます、和尚さんは不思議で堪りません。
「お前は昨日わしの内へ來て金の茶釜を賣つたじやないか」
「いいえ、そんな事はちつとも知りません、私は毎日ふとんの中でうめいてをります」

勘右衛はまことしやかに言ひました。
「じや、わしの内に來て金のちや釜を賣つて行つたのはお前じやなかつたのか？はて不思議だうむ、では狐が勘右衛に化けて來たのだな、ああ、馬鹿なことをした、百兩の金を見事に狐にとられて仕舞つた」
和尚さんは力を落して歸りました。
「これでやつと一安心」
勘右衛はむく〳〵と蒲團をはねかへして起きて、につこり笑ひました。

涙が溢れる

村の若者達が月夜の晩に、五八人集まつて御馳走をこしらへました。仲間の一人が小便に表へ出たが急いで家には入つて來て
「おい、向ふから勘右衛が來るぞ、あれが來たら御馳走を食はせねばならぬ何うしやうか」

と言ひます。
一人が
「あの奴馳走を食べようと思つて來てゐるに違いない、あの奴は人一倍食べる癖に一文だつて割前を出した事はない」
又一人が
「さうだ〳〵、あんな奴に食はせて堪るか、早う戸を締めで勘右衛を家へは入らかしてはならん」他の連中もみなそれに同意して戸をピシャツと締めて仕舞ひました。
やがて勘右衛が來ました。戸を開けやうとしても開きません。
「おい〳〵俺だ、戸を開けてくれ」
誰れも返事をしません。
「おい〳〵若い衆、早く開けさつしやれ、溢れるぜ、溢れるぜ、早う開けさつしやい」
若い者は、こぼれると言ふので不思議に思ひました。

「おい、珍らしいぞ、勘右衛がこぼれると言つてゐるぜ、何か持つて來てゐるか知れぬ、開けて見やうじやないか」
「何か持つて來てゐるのかも知れぬ、でなければこぼれるなどと言ふ譯はない」
「では開けて見るかな」
そんな事でみなは戸をあけることにしました。
「おい〳〵今あけるから、こぼさぬやうに待つてゐらつしやい」
さう言つて戸をあけました。
勘右衛は何ももちません。
「おい、勘右衛どん、今先こぼれると言つたのは何かへ、早く出しなされ」
勘右衛はにこ〳〵笑ひながら
「若い衆、こぼれるといつたのはわしの涙じや、中にいれてくれないので、わしや涙がこぼれさうじやつたわい」

と言ひました。
若者連は
「なんだい、また勘右衛から一杯食はされた」と言つて顔をしかめた。

まことの幽霊

濱崎に若手人氣の芝居が來ました、勘右衛は芝居を今迄見た事がないので、今度初めて芝居見物を思ひ立ちました。
粗末な平素着を着て、煎餅のやうな草履をはいて、一人で濱崎まで行きました。
木戸札を買つて、掛小屋の中へは入りました、すると藝題は播州皿屋敷で何だか恐ろしいやうな場面でした、太皷がドロ〳〵と氣味惡く響くと、髪毛の長い、顔の蒼白い、一眼見ても魂が拔けさうな幽霊が出て來ました。
幽霊を見た事のない勘右衛は、ハハア、幽霊といふものはあんなものだな、そして幽霊の出る

時は太皷がなるものだなと思ひました。
まもなく芝居が終へて、みな家にかへります、勘右衛は一人虹の松原を歩いて通ります。
大石村の若者は、勘右衛より一足先きに歸つてゐました。
「よい、今日は珍らしいじやないか、裏町の勘右衛が芝居見に來てゐたよ」
「ほう、それは珍らしいな」
「もう歸つたかへ」
「いや、後から自分一人歩んで來てゐるよ」
「よい、平素は俺達はよく勘右衛から欺されるから、今日は一つ勘右衛を恐かしてやらうじやないか」
「それや面白い、勘右衛の仇討はいい思ひ附だ、そしてその手立は」
「それは何でもないよ、誰れか幽霊に化けてこの松原にかくれてゐるさ。そして勘右衛が來た時そつと出て來る、すると勘右衛は恐さに逃げることも出來ずそこに倒れるに違ひない、その

時俺達が出てみんなで笑つて遣る」
「それはいい思ひ付だよ」
「では實行う」
さあみなでその準備にとりかかりました。仲間の内で一番やせた八兵衛といふ男が幽靈になることになつて、誰かの白い着物を着て勘右衛が來たら松の蔭から出て來ることにして待つてゐます。
勘右衛は一人で何心なく松原の中程を通つてゐると、松の蔭から白い着物を着た怪物が不意に出て來ました。
勘右衛は驚くと思ひの外、大聲で
「まことの幽靈ならば太鼓がなる筈じや、太鼓がならぬから嘘の幽靈じや」と言ひました。
蔭でこの様子を見てゐた若者達は、開いた口が閉がりませんでした。

狐の女郎

ある日、勘右衛が千人塚の近所を通つてゐると、狐が川ばたでいろ〳〵な事をして女に化けてゐました。
「ハハア、今に女に化けて來るに違いない」と勘右衛は思ひながら知らぬ顏して歩いてゐますと、果して向ふの方から奇麗な女がやつて來ます。
勘右衛は之に違ひないと思ひましたから、出逢ふと直ぐ、
「おい、お前は狐じやないか、この勘右衛を騙さうとしたつて駄目だぞ」と言ひました。
狐は吃驚して、
狐「恐れ入りました。」
勘「だがね、お前なか〳〵化け方が旨いぞ、外の者だつたらとても解らんよ、どうだお前と二人でぐるになつて金儲をして見やうじやないか」
狐「やつて見ませう、そしてそのやり方は」
勘「何でもないさ、お前はその儘私について來い、お前を滿島の女郎屋に賣よ、さうすると

前は毎日御馳走ばかり食べていいよ」

狐「じやどうぞお頼ひします」

それから勘右衛は狐の化けた娘をつれて滿島一番の女郎屋一休亭に行ました。

勘「見て下つせ、いい玉を持つて來ましたよ」

一休亭の主人は娘の顏を一目見るより直ぐ氣に入りました、年の頃は十七八顏の白さ髪の黑さ眼もと涼しく鼻すじ通つて、何處と言つて批難の打所のない別嬪でした。

主「この玉は幾らかね」

勘「五百兩」

主人は即座に五百兩のお金を勘右衛に渡しました。

唐津ではその晩から大評判です、一休亭には素晴らしい別嬪が來たと言ふのです。その晩から大勢の客が押寄せて來ました。

飲めや歌へやの大散財がありました。

翌日、この別嬪が一つも起きないので、主人がその室に行つて見ますと蒲團の中にもぐり込んで寢てゐるやうてす、

「こら、もう起きろ、もう晝過ぎになつた、早く起きろ」

主人が起しても起きません、主人も腹が立つたので蒲團を引つ脫ぎました、すると蒲團の中に大きな狐が寢て居ました、蒲團を脫がれたので吃驚して外へ飛んで逃げて仕舞ひました。

一休亭の主人は五百兩を全く損しました。

隱れ笠に隱れ蓑

勘右衛がをる所の近所に、天狗松がありました、天狗松といふのは、大きな松の木の中程に、小さい枝が集まつて、短かい松葉が澤山附いてゐます、それが聞くかたまつてゐます。

その天狗松には、天狗さんがゐられるのです、けれども、私達の眼で見ては、天狗さんは見へません、それはなぜかといふと、天狗さんは隱れ笠に隱れ簑といふ寶物を持つて御座る、その

隱れ笠に隱れ簑さへ附けてをれば決して人間の目では見えぬさうです。
裏町の勘右衛は、どうかして、あの天狗さんの隱れ笠に隱れ簑を奪つてやらうと考へてゐました。

ある日、勘右衛は、古い茶ぶれ(之は米等を入れて搖すぶつてごみを選るものです)を一つ持つて、天狗松の下に來ました、そして茶ぶれを頭に載せて

「天ぐさま、其處へゐらつしやる、天ぐ樣其處へゐらつしやる」

勘右衛はしきりにそれを繰り返して言ひました。

天ぐさんは、あの勘右衛があんなことを喋舌つてをる、俺は隱れ笠に隱れ簑を着けてをるから見へる筈はないと平氣で居られます。

「天ぐさん、其處へゐらつしやる、天ぐさん、そこへゐらつしやる」

勘右衛は根氣强く言ひます、すると天ぐさんは「どうもお可笑しい、ひよつとすると俺の姿が見へるのではあるまいか」と思はれました。

「おい勘右衛」

「へい」

「お前はそこからわしの姿が見へるか」

「へい、立派に見へます、この茶ぶれを被つてをれば何でも立派に見へます」

「わしはこの隱れ笠に隱れ簑をつけてさへ居れば決して人間の眼では見へぬと思つてゐたが、わしが人間から見られたのは今度が始めてだ」

「それはこの私の大切な寶物の茶ぶれのお蔭です」

「偉い寶物だ」

「天ぐさん、あなたの寶物と替へませうか」

「うむ」

「私は少し損をしますけれど替へませう」

「ではね、ちよいと貸してみないか」

「いいですとも」
天ぐさんは思はず勘右衛からだまされて松の木からコソ〳〵降りて來ました。
「勘右衛、ちよいと貸して見ろ」
天ぐさんは自分の隱れ笠に隱れみのを脫いで勘右衛の茶ぶれを被りました。
「勘右衛、何うかい、見へるかい」
「いいにちつとも見へません」
天ぐさんは得意になつてをられます、勘右衛は天ぐさんが眞裸で茶ぶれを被つてゐらつしやるのがお可笑くて堪りません。
その內に勘右衛は天ぐさんの隱れ笠に隱れみのを素早く自分の体につけて仕舞ひました、さうなると、今度は勘右衛の姿はちつとも見へません。
「おい勘右衛、どこにをるか」
天ぐさんは幾ら呼んでも勘右衛は返事をしません、天ぐさんの大事な寶さへ貰へば用事はない

のです。走つて逃げて仕舞ひました。
天ぐさんはその茶ぶれを被つて再び天ぐ松にゐました、けれどももう誰の眼にも天ぐさんの裸姿が見へます、近所の子供が見附け出して
「あれ見ろ、天ぐじやないか」
「眞裸で妙な奴だなあ」
そんな事を言つて遂う〳〵馬鹿にされてしまひました。
勘右衛は隱れ笠にかくれみのが手に入つたので、何處か祝ひごとなどがある時は、それを着て家には入り込んで、酒を飲んだり、魚を食つたりしたものです、それ位でなく、庭に吊り下げてある鯛や鰤などを盜んで、かくれみのの中に包んで持つて歸へるので、村の人は大變に困りました。
「不思議なことじや、婿殿の內からもらつた鰤が無くなつた」
「わしの內にも、買つて來た大鯛が無くなつた」

そんな評判をするやうになりました。
まもなく、村の庄屋の内に、隣村からお嫁さんが來ることになりました、丁度その祝儀の晩の事です。
勘右衛は、例の通りかくれ笠にかくれみので庄屋の内の座敷には入つて、お酒を矢鱈に飲んでゐました。
うつかりして、つい飲み過ぎてその場で眠つて仕舞ひました。
其處へお客が乘り込んで來て、勘右衛の上に簞笥や長持を載せました、ハツと思つて眼を醒ました時はもうかくれがさにかくれみのは散々に破れてゐました、勘右衛は体一つで、放々の體で逃げて歸りました。

鯛

十月頃になると、唐津近郷の供日(神祭)がきます。

貧乏人の勘右衛には、近所の村の供日詣は一番樂しい年中行事の一つでした。
玉島供日の時です、勘右衛は鯛を一匹提げて、朝から玉島村へ出かけました。
「御免なつせ」
威勢のいい聲で戸口の障子をガラツと開けて、は入ると直ぐ提げて來た鯛を庭の眞中へ吊り下げました。
家の人は、
「おや、珍らしい事じや、勘右衛さんが大きな鯛を土産に持つてくるなんて」さう思つて勘右衛を座敷の眞正面に座らせて待遇しました。
勘右衛はたらふく御馳走を頂戴して、
「おほきに、御馳走さま」
さう言つて頭を下げると、庭に吊つて置いた鯛を持つてさつさと外へ出て仕舞ひました。
「おや、あの鯛は土産にくれたのではなかつたか」

さう言つて口惜がりましたがもう仕方がありませんでした。
勘右衛は、どの家でもこの流儀で、鯛を一匹持つて廻つた許りで大變な待遇を受けました。

頭巾と巻物

鏡山のおさん狐が態々京都伏見のお稲荷様へ行つて、巻物を授かつて來ました
その巻物を持つてをればお稲荷様になれる大切な巻物であります。
勘右衛がその話を聞いて、どうかしてあの巻物を奪ひとつて自分がお稲荷様の位にありつきたいと考へました。
ある晩方、勘右衛は古い頭巾を被つて鏡山の麓を通りました、おさんは例のやうに女に化けてやつて來ます。
「おい、お前はおさんだな、駄目だよ、そんな化方でこの勘右衛を欺さうなんて思たつて欺されるもんか」

「勘右衛さん、どうも恐れ入りました、あなたはどうして私が鏡山のおさんと言ふことが解りますか」
「それか、それはこの頭巾を見ろ、これさへ被つてをれば何だつて解らぬことはない」
「それは偉い寶物で御座りますな」
「さうだよ、時にお前は何でも京都伏見のお稲荷さんから巻物をもらつて 來 たさうじやないか」
「よう御存じですな」
「この勘右衛には何でも世の中の事は解つて仕舞ふよ」
「恐れ入りました」
「おさん、この頭巾さへ持つて居れば何が化けてゐても直ぐ正体が解るし、自分で化けやうとか、體をかくさうとか思つたらこの頭巾一つで化けたり、身をかくしたりする事が出來る、何うだ、お前の巻物と私の頭巾と替へようではないか」

おさんは勘右衛の話を聞いてその頭巾が欲しくて堪りません。

「勘右衛さん、代へて下さいな」

と言ひました。で勘右衛は見事に狐のおさんからお稲荷様の卷物をとりあげました。

おさんは、いい寶物が手に入つたと大喜びで、早速その頭巾を被つて魚屋に行つて、自分は立派に體をかくした積りで、安心して魚を片つ端から盗んでゐる所へ魚屋の嫁さんが見附けて

「それ、古狐が魚を盗んでゐる、早う打ち殺さつしやれ」

頓狂な聲で叫びましたので魚屋の主人が怒つて其處にあつた魚カギを打ちつけました、狐は失策つたと魚を投げ捨てゝ放々の体で逃げてかへりました。

おさんは勘右衛から欺まされた事が解つたので殘念で堪りません、何うかしてあの卷物を取返さねばならぬと思つてゐます。

ある日、勘右衛の内に庄屋さん達が五六人やつて來ました、勘右衛は大ひに光榮に思つて何もかも惜しまず歡待を致しました。

庄「勘右衛、お前は狐から卷物を取つたといふ話じやが。本當かい」

勘「へい、伏見のお稲荷様の卷物を狐から取つて參りました」

庄「それは珍らしいものを得たもんじや、ちよいと見せさつしやい」

勘右衛は笈の中に藏つてゐた卷物を大切さうに出して來ました。

庄「これは珍らしい」

四五人の庄屋達は交る〴〵見て感心してゐます。

庄「勘右衛、斯んな珍らしい寶物を俺達が一人や二人で見るのが惜しい、外の人へも見せたいからちよつと貸してくれ」

勘右衛は庄屋に厭とも云へません、貸してもまた返してさへ貰へばいいと思つたので

「いゝですとも」

と云つて心よく貸してやりました。

庄屋達は直ぐに歸りました、勘右衛は庄屋達の座つた後を見ますと狐の毛が散らばつてゐます

「失策つた」
勘右衛は狐から奪ひ返された事に氣附きましたが追つ附きませんでした。

菜を蒔いて五十兩

勘右衛は、平素から日蓮宗の妙法寺の和尚さんと心安くしてゐました。和尚さんもなかなか面白いお方でしだがある日勘右衛に揶揄半分に
「私に「南無阿彌陀佛」と言はせたら五十兩お前にやる」と言ひました。
日蓮宗に深く凝り固まつた和尚だけに、眞宗の南無阿彌陀佛など容易に言ふ筈はないのですが勘右衛はなに、私が吃度言はせて見せると決心して、その日は別れました。
それから、二三ヶ月經つて久し振で勘右衛は妙法寺に出かけました。
和尚はもう、勘右衛と五十兩の賭をした事は忘れてゐます。
「おう、勘右衛、久し振りじやな、近頃一向見へんだつたが何處かへ行つたかへ」

「へェ、一寸、上方見物に行きました」
「それはいゝ事をなさつた、何か面白い土産話があらう」
「へェ、別に面白いといふこともありませんが、和尚さん、上方では面白い事をやつて畑に種を蒔いてゐましたよ」
「ホウ、どんな工合に」
「そりや一寸口では話せませんな、何うです、和尚さん一つ實地にやつてお目にかけませうか」
「實地にやつて見せる？それは一段と面白からう」
二人は裏の畑に出て愈々種蒔をすることになりました。
「和尚さん、では私が先に行きますから、あなたは私の後からついて來て下さいよ」
「ようし」
「そして私か言ふ通り言つて下さいませ」

「ようし」
さあ愈々種蒔が初まりました、勘右衛は妙な頬冠をして、左に種の入つた笊を持つて畑の中を歩き廻ります、和尚さんはその後から付いて廻ります。
「では初めます、ようがすか、――この畑に」と勘右衛か言ふと「この畑に」と和尚がつけます。
勘「何をまいた――
和「何をまいた――
勘「菜まいた――
和「菜まいた――
勘「なあまいた――
和「なあまいた――
勘「なあまいだ――

勘右衛の聲は次第に調子づいて來ました、和尚も調子づいてきます。
和「なあまいだ――
勘「なあまいたぶつ――
和「なあまいだぶつ――
勘「南無阿彌陀佛」
和「南無阿彌陀佛」
和尚はうつかり勘右衛の口車に乗つて言つて仕舞ひました。
「和尚さん、五十兩貰ひませう」
言はれて漸く氣が付いた和尚、
「アツ」
「和尚さん、さあ五十兩、約束通りに貰ひませう」
和尚さんは今更前の約束をとり消す譯にも行かず五十兩を見事に勘右衛から卷き上られました

閻魔王

勘右衛が死んであの世に行つてからの話です、六道の辻や三途の川や、賽の河原も無事に通つて愈々閻魔の廳に參りました、此處では淨玻瑠の鏡があつて生前の善惡がみなその鏡に寫るさうです、此處では閻魔王様が一人一人に就いてお調べがあります。

勘右衛は、恐る恐る王の前で顔をあげると遙かの高段から閻魔王の聲がかかります。

王「その方儀、生前は何んな仕事をしてゐたか」

勘「はい、私は鮪を笊で掬ふて捕るのが仕事でありました」

王「さうか、そして笊で鮪を捕るには何うして捕るのか」

勘「王様、鮪をすくうのは大變に面白い仕事でありますがなか〳〵口の先では説明ができません、みのとかさと笊をおかしくだされば實地にやつてお目にかけます」

王「うむ、そりや面白い、誰かみの、かさ、笊を用意致せ」

王様の命令によつて青鬼がそれを持つて來ました。

王「勘右衛、やつて見せよ」

勘「ハツ」

勘右衛は早速みのとかさを身につけて、ざるを抱へ、鮪すくひの眞似をしました、ざるをひよいと向ふへ押して、右足で藪を踏むのです、すると藪の下にゐた鮪が出て來る筈それをひよいと掬ひ上げる、それはまるて藝者が鮪すくひを踊つてゐるやうです、閻魔王もそれを見ていかにも面白さうに顔を崩してお笑ひになります。

勘「大體こんなものです、之れはみてゐては面白くはありませんが自分がやつて見るとそれは〳〵面白いので御座ります、王様、一つやつて御らんなさい、なかなか面白御座ります」

勘右衛の話を聞いた閻魔王様はどうやらやつて見たくなりました。

「ではちよつとその道具を貸してみよ」

王は高い段から下りてみのかさを身につけて、ざるを持つて鮪すくひの眞似をし初めました

その間に勘右衛は素早く王の衣類をつけて上段に登つて自分が閻魔王となつて聲高々と叫びました。

「其の方儀、生前殺生をせし故を以て地獄道に落すものなり、者共早くこの奴を捕へて火の山に投げ込めつ」

上段から叫んだので、赤鬼、青鬼は閻魔王様の號令だと思つて走つて來て鮨すくひをしてゐる王を地獄の火の山に投げ込んで仕舞ひました。

勘右衛の子

瓜の蔓に茄子はならぬと言ひますが勘右衛の子も矢張り勘右衛に似て法螺を吹くことが上手でした。

その頃、筑前から、九州一の法螺吹の大將と言はれた福間の又左衛門が、唐津に勘右衛といふ法螺吹が居ると聞いて、一つほらの吹き較べをして見やう、と思つて、態々筑前の國から唐津

に訪ねて來ました。

裏町の近所に來て、勘右衛の家を見付けましたがなか〳〵判りません丁度其所へ七つ八つ位の子供が、溝に小さなざるを持つて遊んでゐます。

又「おい〳〵、この邊に勘右衛と言ふ男がをる筈だがお前は知らんか」

子「勘右衛つて私の親父だよ」

又左衛は思ひがけなく勘右衛の子に出會つたので、どんな子か一つ試めして見やうと思つたのです。

又「お前の親父は何處へ行つたかい」

子「親父は富士の山が昨夜の風で吹き倒れさうだつたので、線香二本持つてつんばりに行つたよ」

又「お母は何處に行つたか」

子「昨夜雷がなつて、雲が少し綻びさうだから針と糸と持て縫に行つた」

又左衛は、この子供、なか〳〵馬鹿にならんと思ひました。

又「おい昨夜、うちの石臼が風に吹き飛ばされて何所へ行つたかわからんがお前は知るまいな」

子「それかい、それは内の雪隱小屋の蜘蛛の巣にひつかかつてゐたよ」

又「お前は其處で何をしてをるか」

子「俺はさるで鯨をすくつてをる」

之を聞いた又左衛は、勘右衛の子でさへこの通りほらを吹く、親父だつたらどんな大ほらを吹くか知れん、迚ても俺は勘右衛には勝てぬと思つて、そのまゝ筑前へ逃げて歸へりました。この子は二代目の勘右衛です。

附錄

傳說 松浦佐用姫

附録

傳説 松浦佐用姫

大伴の連、狹手彦が、時の帝宣化天皇の勅を奉じて、任那討伐の爲、西下して肥前篠原の郷に來たのは、夏も過ぎて、虫の音すだく秋の初であつた、道ばたには桔梗、女郎花などが其處此處に咲いてゐた。

陽は漸う西に傾いた頃であつた、甲冑を身に纒ふた武夫達が、大旗を飜へして、松浦川に沿ふて、篠原の郷に近づいて來た。

「ようい、ようい、見さつしやれ、今兵士達が見へましたぞ」

「あれ〳〵、噂に聞いた三韓征伐に行く兵士達」

「あの大きな旗、それ〳〵澤山の兵士達じや」

篠原郷の男の子女の子は、道の兩側に待ち迎へてゐた。

兵士達は眼の前に來た、みな色黒々とした武裝いかめしい武夫ばかりであつた。

列の後に五色の玉を飾つた物の具に、馬上ゆたかに鞭を振つてゐる眉目秀麗の大將の姿が、殊更に人の眼を牽いた、それは言ふ迄もなく大將軍大伴の狹手彦であつた。

篠原郷につくと、狭手彦は川岸の櫨の木に馬を繋いだ、そして兵士達を川の堤に憩はせた、兵士達は物具をとつて、砂上を流るる川の水に足を入れて、顏を洗ひ口を漱ぎなどした、鏡のやう水の面に、陽に燒けた自分達の顏を寫して苦笑した者もあつた。

篠原郷の人々は、都の兵士を犒ふべく、家々の手作りの酒を集め、芋の子などを煮て大將軍達の前に差出した、兵士達は人情麗はしい篠原の郷が懐かしかつた、且つは連日の行軍に疲れ果てた體を、斯かる山水明媚の地に暫くでも休むことは兵士達のすべての望であつた。

慈悲深い狭手彦は彼等の勞を慰むる爲、暫くこの地に休養することを命令した、兵士達は大將軍の恩に歡喜した。

人情濃かな郷人達は、わが日の本の軍人達を留むを光榮として、爭ふて兵士達を家に案內した、そして出來るだけの待遇をした、川の鮎を釣つたり、松原の松露を掘つたりして膳に備へた、家の娘子達は土地の珍らしい話をして兵士達を慰めた、兵士達は心も打解けて、夜は郷人には不思議に思はるるやうな都の話をした、わけて畏き帝の御事を聞いては、その有り難さと偉大さとに感激して、涙さへ浮かべた、斯くて夜の更け行く事も忘れた。時には鷄の鳴く聲に驚いて床につく事さへあつた。

大將軍、大伴狭手彦は、勿論篠原長者の內に迎へられた、長者は一代の面目として、氣をこめて心を盡して待遇した離れ家の一室には帛の幕を張り、床には珍品を飾つた、明け放した庭には老松の翠、呉竹の囁き、紅葉の崖から水晶の清水が、絲のやうに泉水に落ちて、不斷の小皷を鳴らしてゐた、池には眞鯉緋鯉が群をなして泳いでゐた。

狭手彦は、旅につかれた身を棕梠の柱に寄せて眤つとその庭を見入つてゐた。

「大將軍さま」

と後に人のけはいがした、振り返ると其處にはうら若い乙女が、面はゆげに手をついてゐた

「お夕飯を召し上つて下さりませ」

房々とした黑髮、柔かい曲線の頰。黑燿石のやうな瞳、それは花も耻らう手弱女であつた。

「御身は當家の娘御か」

「左樣で御座りまする」

都を出でて幾十日、野に臥し山に寢ねて、心荒んだ身に、玉のやうな清楚端麗な手弱女を見ることは、長く續いた旱魃の日に雨を得たやうな歡びであつた。

狭手彦は間々に乙女の顏を偷み見た。

「御身の名は何と申さるる」
「佐用と申しまする」
「お年は幾つ」
「十八になりまする」
狹手彦はふと我にかへつて箸を取つた。
日は矢のやうに過ぎた。四邊の山々は黄に紅に染められ、松浦川の水は、兩岸の紅葉を浮かべて、秋けたなはの氣分を漂はせてゐた。
武夫達は人情濃かな篠原郷を去るべき日が近づいて來た、それは近々に出發といふ布令が下つたからである。けれども狹手彦は、その時は佐用姫と離れ難い戀仲となつてゐた。
一筋の戀の髪には、大象も繋ぐの譬へ、蜜の如き抱擁、つきぬ宵々の睦言は秋の夜の虫の聲と共につきなかつた、けれども、それは所詮一場の夢と諦めねばならなかつた、重き君命を一身に背負ふてゐる狹手彦は、一婦女の爲に長くこの地に滯留を許さない。
「何事も時節を待ち給へ、大命を果した曉には、屹度御身と共々に都へ歸る程に、ここ暫くの辛抱じや」

狹手彦は毎夜々々姫をあやすのであつた。
狹手彦はかくてあるべきでない、寄り縋る姫を拂ひ退けて馬に跨つた、それは腸を千々に裂かるゝ苦しみであつた。
斯くて篠原郷を出立して、程遠からぬ鏡の郷についた、豫て狹手彦の命に依つて、軍船幾百艘、兵糧まで用意されてあつた。
兵士達は意氣勇ましく船に乘つた。秋の空は愈々澄み渡つて、煙波萬里一眸に集まつた、兵士達は遙かに天の一方を睨んだ
船は順風に帆を孕ませて、瑠璃紺色の波の上を辷るやうにして冲へ進んだ。
姫は一室に引籠つて泣いた、泣いても泣いても狹手彦を慕ふ心は薄らぐべくも無い、姫は矢庭に身を躍らして狹手彦の後を追ふた。
行合ふ人毎に狹手彦の消息を尋ねた、人々は髪を亂したはしたなき樣子に、狂女と思ふて相手にさへしなかつた。
姫は益々狂ひあせつた、そして鏡の郷に來た時はもう狹手彦の船は遙の冲に點々として認め得るに過ぎなかつた。

姫は一層氣をいらだたせた、けれども飛ぶ羽もなければ空に架する梯子もない、野分の風につばさを折られし蝶が、地の底に投げ込まれたやうなものであつた。

けれ共姫は諦めなかつた、如何にもして狭手彦の後を追はうとした、ふと其處に亭々と聳へてゐる鏡山に眼を注いだ、姫は一人頷きながら喘々その山に馳せ登つた、際涯なき大海原に、狭手彦の船が細く幽に見へた。姫はわが心を見せむものと、衣の袖を打振り〳〵してその船返せと招いた、けれ共船は情れなく西の空へ消え失せんとした。

姫は再びその船を追ふた、ひた走りに走つて呼子から加部島へ來た、そして聲の限り身の限り空を仰ぎ地に伏して慟哭した、かくて姫はその儘冷たい石に化した。

呼子加部島の田島神社には石に化した姫をその儘御神体として祀つてある、貞女佐用姫の傳說は、永劫に人の口から消ゆる事はあるまい。

（終り）

大正十三年十月廿五日印刷
大正十三年十月廿九日發行
昭和九年十一月十八日三版

【定價三十錢】

佐賀縣西松浦郡波多津村筒井二九番地
著者　古川政次郎
佐賀縣唐津市一、九三四番地
印刷所　鈴島印刷所
佐賀縣唐津市一、九三四番地
印刷人　吉岡杢太郎
佐賀縣唐津市一、九三四番地
發行所　鈴島印刷所
佐賀縣唐津市一、九三四番地
發行人　吉岡杢太郎